

八つの大罪

野良風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡が七つの大罪の世界へ
キヤラ崩壊あり
誤字あり

目次

	ケンカ祭り	グリグラとハチマンのケンカ	敵襲ケンカ祭り	ラウンド2ハチマンVSグルグリウス							
1話											
2話											
3話											
4話											
仲間の行方											
ハチマンVSグルグリウス											
聖騎士とバトル											
到着バステ監獄と新たな仲間											
もう一人の大罪人											
夢の話											
	78	68	57	51	46	41	36	32	21	12	1
番外編	デイアンヌと小町の異世界旅行										
	131	126	122	117	111	106	99	93	89	83	

136

八つの大罪高校

雪ノ下 & a m p ; 由比ヶ浜 V S メリオ

ダス&a m p ; バン

147 143

1 話

「大ジョツキ五つ」

「まだ入れるかい」

「お客さん人数は」

「三人で」

「〈豚の帽子亭〉にようこそ」

「おーい何でもいいからこつちにつまみ」

「あいさ」

「おいハチマン、適当につまみを」

「了解」

そこには、小さな少年とアホ毛を揺らす少年が二人

「おい、ハチ残飯あるか」

「今は無いぞホーク」

「マジかよ」

それと喋る豚が一匹

「メリオダス、はいミートパイ出来たぞ」

「はいよ」

ミートパイを受け取り

「おまちどお〈豚の帽子亭〉特製ミート」

「おおうまそう」

口に運ぶと

「旨い」

「だろ」

「うちのシェフも中々のもんだろ」

ニシシシと笑う

「そういや、聞いたか? さまあよう鏑の騎士の噂・・・」

「ハチ腹へつた」

「ほら残り物だ」

「鏃ついた鎧を着こんだ・・・ 最近出没するっていうユーレイ騎士だろ」

「なんだか気味が悪いよな」

客の話を聞いてませんけど

「メリオダス鏃ついた鎧って」

「さあな」

メリオダス酒をついだまま答えた

「しかもそいつうわ言のように何かを呴きながらさよつてるつて」

「怖つ」

ズシャツ

「ん」

「どうしたんだハチ外を見て」

「何でもない」

「ほらそこの手配板」

「え・・・つとそ уд」

「八つの大罪」

「10年前に王国転覆を謀つた大罪人だつけ」

「こいつらまだ捕まつてないんだろ」

「死んでるねそれ絶対聖騎士たちが許すわけないよ」

「でもこの手配書毎年更新されてるぜ？聖騎士も必死に探してることじやねえの」

「その、鎧の騎士、つてまさか『八つの大罪』のユーレイじや・・・」

「普ふなどこの鎧くせえニオイは？」

「ホークも臭うのか」

「鏽のニオイか」

「ああ、何か起きそうだな」

食器を洗いながらホークと喋っている

「それで他の仲間を探し回つてゐるかもよ」

「なあ小僧の店員さんはどう思う」

開けた酒瓶をテーブルに置き

「小僧じやねーよメリオダス

それと店員じやなくてマスターな

「マスターこんな子供が

「あれ・・・?メリオダスつてどつかで聞いたことあるような

「らつしやい」

「コフー」

店に鏽ついた鎧が入つて來た

「八・・・つの・・・たい・・・ぎ・・・い」

「でたああああ／＼＼＼＼＼＼＼＼

「八つの大罪」だー」

客は外へと逃げ出して行つた

そして、店にメリオダス、ホーク、ハチマンだけが残つた

「お前誰だ」

メリオダスは鎧ついた鎧の舞絵に立つたが

ドシャアツ

鎧ついた鎧は倒れ兜が落ちた

兜の下は

「女の子・・・だせ」

女だつた

「女だな」

「うんにゃ」

「ええつ」

メリオダスは、鎧を剥ぎ

「この寝顔」

「この体曲線」

「このニオイ」

胸を触りながら「この弾力」

「やつぱり女だ」

「このつ・・・確信犯」

「辞めろメリオダス」

目を覚ましたがメリオダスは、まだ胸を触っている

「あ・・・あの・・・・・・」

「動機にも異常なし」

「ありがとうございます」

「ハアー俺は、下で料理作つおくからな降りてこいよ」

ハチマンは、厨房に行つた

「介抱していただいた上に食事まで私なんてお礼を言えбаいいか」

「せつかく作つたんだ食べてくれよ」

「そうだぜハチの特製だぞ」

「ご飯を口に運ぶと

「美味しいです」

「そうか良かつた俺は、洗い物をしてくる」

ハチマンは、ほつとした

「何でお前あんな鎧姿で何してたんだ?」

「探してゐるんですへ八つの大罪を」

ドンツ

「開けろ」

扉をドンドンと叩いている

「村人からの通告があつた」

「我々はふもとに駐留する聖騎士様配下の騎士団へ八つの大罪とおぼしき鎧の騎士を捕らえにきた」

「なんかうるせえ奴が来た」

「なんだよ空氣読めない奴らだな」

洗い物をしながら喋つてるとホークが

「洗い物をしながら喋つてるからカツコ悪いぞハチ」

「おとなしく出てこいさすれば我々も剣は抜かん」

「くくく・・・所詮は古騎士か我々に畏れをなしたな」

「よーしでは30秒だけ時間をやる」

「いらん」

メリオダスは、直ぐに扉を開いた

「早つ」

「つてなんだ貴様は」

「オレはマスターだ」

「鏑の騎士はどこにいるそいつを出せ」

「出てこいよ」

「ハツ物分かりがいいじゃないか」

「フツ俺を読んだがこの鏑の騎士を」

「出てきたのは鎧を付けたホーグだつた

「この豚が『八つの大罪』ですか」

「なわけないだろ」

「ななんと俺は残飯処理騎士団団長なんだぜ」

「んな騎士団があるか」

「この豚で良ければ煮るなり焼くなり好きに」

「どつちも堪忍しろ」

メリオダスは、首を持ち上げられた

「ガキ騎士を愚弄するとは良い度胸だな」

その隙に女の子が逃げ出した

「アリオーニさん裏から女が逃げ出しました」

「何」

「おそらくその女が鎧の騎士追え」

騎士達は、追つていた

「ハチマンお前は店番してろ」

「了解」

メリオダスは女の子を追つた

洗い物が終わり店に1人に成ったハチマンは

「ハアー、小町と戸塚に会いたい」

実はハチマンは、異世界から来た

修学旅行の件で二人とギクシャクしていた部活にも顔を出さなくなり帰り途中に事
故に会つた

「車に退かれて目を覚ますと知らない世界にいるんだからな」

ハチマンは、テーブルに合った果物を手に取り

「しかも俺が魔法を使えるとは」

果物を上に投げた

そして、ナイフで果物を影を切つた
すると果物が影と同じように切れれた

「便利だよなこの力」

「うわあああん~」

扉が開きホークが飛び出してきた

「どうしたんだホーク」

「見ろこの豚串状態」

ホークに木の枝が刺さっていた

「ほら、こっちに来い」

ハチマンは、木の枝を抜いた

「悪いな」

「気にするな」

「よし、おつ母頼むぞ」

すると店の下から巨大な豚が出て來た

「薬塗るから来い」

ハチマンが薬をホークに塗り終わつたとたん

ホークママがジャンプをしたそして

ドンッ

ハチマンは、外に出てはしごをおろした

「ナイス、ホークママとハチマン」

「さつきと行こうぜメリオダス」

「そうだなハチ」

「そうだエリザベス」

「はい」

メリオダスは、ハチマンを指を指し

「こいつも〈八つの大罪〉のハチマンだ」

エリザベスが目を開き呆然し

「え？」

エリザベスは、驚いた

2話

「改めてよろしくお願ひします」

エリザベスは、もじもじしながら挨拶をかわし

「それと、ハチマン様」

ハチマンの方を向き頭を下げた

「エリザベス・リオネス王国の第三王女です」

「よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしく」

二人は、軽く挨拶を交わした

「〈豚の帽子〉亭にようこと今日から頼むぞ看板娘」

「はいがんばります」

「まずは、服をどうにかしないとな」

ハチマンが言うと

「バカだなハチマン、アレはアレでそそられるだよ」

メリオダスは、喋りながらタンスを漁っている

「おっ、あつたあつた」

店の制服は、メリオダスの趣味全快だつた

「店の制服だ」

「お前の趣味だろ」

「じゃハチマンは、どんな制服だ」

「俺は・・・」

ハチマンは、タンスを漁つて1つの服を取り出した

「俺は、これだ」

ハチマンは、メイド服を取り出した

「なるほど」

メリオダスは、メイド服を眺めて

「これはこれで良いな」

「お前ら何やつてだよ」

そこへホークが来た

「目的地にあと少しで着くそうだぞ」

「何処へ向かつてるんですか」

「情報の仕入れ先バーニヤの村だ」

「キヤツあの」

エリザベスのスカートをメリオダスがめくつていた

「安心しろただのサイズチエックだ」

「バツキヤローセつかくの看板娘が逃げちまうだろ」

ホークがメリオダスの顔にかじる

「マスターとしての管理責任なのだ」

「すいませんメリオダスは、どんな罪を犯したんですか私は、誤解があると思うのですが」

「実は、ブルタニア各地で下着という下着を盗んだ」

「そして、ハチマンは千人以上の姉ちゃんのおっぱいというおっぱいを揉んで歩いた」

「それは、人には言えないようなもの何ですか

「違う俺は、ちょっとやらかしただけだ」

俺は、エリザベスの質問に返すと

「何をやつたですか」

「元々は、八つの大罪じゃなくて七つの大罪だった

「えつ」

「実はな俺は色々あつて七つの大罪に入つたんだ元々は、代理、サポートとかだつたんだ

それが知らない間に八つの大罪だとか言われるようになつたんだよ」
「罪を犯したがな」

エリザベスが目を開いて驚いていると

店が止まつた

「きやつ」

エリザベスは、倒れメリオダスが受け止めた

「うわ」

ハチマンも倒れホークに抱きついた

「悪い」

「気にすんな」

バーニャの村についた

「話は、あとにするぞハチマン、エリザベス行くぞ」

三人と一匹は、外へと出た

「いろんな地で酒を仕入れてるが此処の酒は格別なんだよ」

「そなんですか」

「メリオダス、川が枯れてるぞ」

「本当だな」

しばらく歩くと人だかりが出来ていた

「どうした祭りか」

「これが祭りに見えるか」

そこには、男達が剣を抜こうとしていた

「聖騎士様の怒りに触れてしまつて」

後ろから1人の少年が歩いてきて

「情けねえ声だして聖騎士の剣なんつて俺のダチの〈八つの大罪〉にかかりやそんなの楽勝だぜ」

すると村人が怒り石を投げつてきた

その石はメリオダスに命中した

そしてメリオダスは、ミードと一緒に豚の帽子亭に避難した

「どうしてこんなことに」

「実は、ミードよくイタズラをしての・・・」

村長は、ミードのイタズラを教えた

「うなんですね」

「村長さん少し話をしても良いですか」

「構わんが」

「ありがとうございます」

ハチマンは、エリザベスの肩に手を置き

「エリザベスとホーク先に豚の帽子亭に戻つてくれ」

「は、はい」

「了解」

「ワシの家に来て下さい」

ハチマンは、村長の後ろを歩き村長の家に入つた

「此処に座つて下さい」

言われた通りに椅子に座つた

「ミードについてですがミードの親は・・・」

村長は、顔をしかめて

「ミードの親は流行り病でなくなつたじや」

「成る程」

「ミードがイタズラをするのは、多分寂しいからではないのですか

「そうかもしません」

しんみりしていると村長の家のドアを叩く音が聞こえた

「村長、取り立てをとりに来たぞ」

村長の家に10人の騎士が現れた

「金を出せよ」

「待つてください」

「なんだと」

村長の首を掴んだ

「辞めろよ」

八幡が騎士の手を掴んだ

「俺らに喧嘩を売つてるのか」

「村長さん、嫌な予感がするので広場に行つて下さい」

「じゃが」

心配そうにするが

「大丈夫です」

八幡は、手を掴んでいた騎士を殴つた

そして騎士は、数メートル吹つ飛んだ

「クソ」

騎士は、顔をおさえながら八幡を睨んでいる

「早く」

「分かった」

村長は、広場に行つた

「来い」

挑発をしたら

「死ね」

騎士達が一斉に襲いかかってきた
八幡は、10人の騎士を殴り
全員の騎士を気絶させた

「ハアー」

ため息をつき空を見て

「(いつも思うが凄いなこの体)」

空を見ていると水しぶきがあがつた

「終わつたみいだな」

八幡は、水しぶきの所へ行くと騒いでいる村人とメリオダスが待つていた

「遅い、ハチマン今から祝杯だぞ」

「マジ」

「マジだ」

「(1人でこの人数をさばくのか)」

そして八幡は、祝杯をしている村人の料理を作っている

「兄ちゃん鳥焼きを頼む」

「ハイよ」

「(こんなにさばけるかよ)」

ハチマンは、目を回していると

「ん?」

「メリオダス」

「分かつてるとかせろ」

そして、ハチマンはまた厨房に戻った

3話

俺らは、今白夢の森に来ている白夢の森に来たわけは、聖騎士も寄り付かないなら八つの大罪がいる可能性があるからだ。

そして森に入つて三時間近く経つて

来ているのは、良いが目の前に・・・目の前に

ホーケが分身している

「どうなつてるだよ」

「どうなつてるだよ」

分身したホーケ達が騒いでいる

「これが森の怪物」

エリザベスは、驚いてる

「確かにとんでもねえな」

「仕方ない俺の力で」

ハチマンは、魔力を使用しようとしたが

メリオダスに肩を叩かれ

「任せろ」

メリオダスが飛び出しホーク達を偽物、本物関係なく全員まとめて殴った
「よ・・・容赦ね〜」

「うおーんハチマンおつ母にもぶたれたことねーのに」
メリオダスに殴れ泣きながらハチマンの後ろに隠れた

「大丈夫かよ」

ホークの姿を見ようと後ろを見ると何人のもハチマンがいた

「どうなってるだよ次は、ハチマンが増えた」

ハチマンは、増えた自分を見て

「改めて見ると俺って凄く目が腐つてゐるな」

自分の目を汚してるとエリザベスが

「そんなことないですよ私は、s」

エリザベスが喋り終わる前にメリオダスが手で口をふさいだ

「エリザベス辞めとけハチマンは、そう言うの馴れてないから」
ハチマンの方は、ため息をついてた

「ハアー」

「ごめんなさい」

エリザベスは、頭を下げた

「どうするんだハチマン俺がまとめて殴るか」

メリオダスは、拳を出してると

「大丈夫だ問題ない」

ハチマンは、魔力を出し

「影縛り」

他のハチマン達にの体に影が縛り付き動けなく成った

「なんだよこれ」

ホークが驚いてるとメリオダスが

「これがハチマンの魔力シャドウ

影を操る事が出来る結構イヤらしい魔力だ」

ハチマンは、影で動けなくなつてゐる偽物のハチマンに近づき

「お前らは、何もんなんだ」

睨んだら

煙が出た煙の中から

「森の怪物の正体は、いたずら小鬼のハイドアンドシーク」三人と一匹でハイドアンドシークの後を追う

「お前ら行くぞ。アイツらの逃げた先に何かいるはずだ」

ハイドアンドシーク逃げた先に

「見てください小鬼達の先に女の子が」

女の子が横になつてている

「大変急がないと」

近くに行くとでかついい女の子がいた

「ディアンヌ様（聖騎士）の侵入を許してしまいました」

「ディ・・・ディアンヌ」

すると女の子が起き

「私たちが聖騎士？ 誤解です」

「デケエ～」

するとメリオダスが消えた

「メリオダス様」

「消えた」

メリオダスを掴んでいた

「聖騎士だと～」

メリオダスを掴み睨んでいる

「メリオダスを食べる気が」

「メリオダス様を離して」

「辞めろディアンヌ」

「メリオダスウ?」

メリオダスを見て

「ようディアンヌ10年ぶり」

するとか

「団長お〜〜♥？」

ほっぺに擦り付けている

「まるで夢みたいだよお」

「これが『八つの大罪』の1人嫉妬罪（サー・ペント・シン）ディアンヌだ」

「ボクが豚の丸焼き好きなの覚えてたんだ」

ホークを捕まえようとしだが

「ディアンヌ悪いけど食べないでやつてくれ」

「あれハチマンもいるの」

ディアンヌがハチマンを見てその次に

エリザベスを見て

「この女の子だれ」

エリザベス 畏まりながら

「は、初めましてディアンヌ様私は、お二方と旅をさせてもらつてます」

「団長とハチマンとで」

「プラス一匹な」

「へーそうなんだ」

「そうそうそんでさ」「

すると

「団長の浮氣者」

地面に叩きつきた

土煙も高く上がつている

「何でそうなるんだよ」

「ようやく好きな人と再開できたと思つたのに女連れなんて乙女心が傷ついたでも言い訳があるなら言つてみて」

「言い訳も何も」

「言い訳無用だ」

メリオダスを殴ろうとした瞬間

「動けない」

動けなくなつた

「影踏み」

ハチマンは、ディアンヌの影を踏んでいた

「落ち着けディアンヌ」

メリオダスが喋り出した

「ディアンヌいいかエリザベスは、聖騎士達の暴走を止めるために俺達を探してるだよ」
メリオダスが説明をし落ち着いたそして、ハチマンは影から足を話した

「私の早とちりごめんなさい」

ディアンヌは、頭を下げた後にエリザベスを睨み

「本当に団長とは、そういう関係じやないんだね」

「はい」

「ついでに俺とお前もそういう関係じやないけどな」

「え？」

「落ち込むなよディアンヌ」

慰めてるとホークが

「何で、お前コイツに甘いんだよ」

ハチマンは、ホークの方を見て

「実は、ディアンヌの声が俺の妹と声が似てるだよ」

「そうなのかよ」

「初耳だぞハチマン」

「あれ、メリオダスに言つてなかつたけ?」

「初耳だ」

ハチマンは、ディアンヌの方を見て

「ちよつとだけでいいからディアンヌお兄ちゃんど「ミいちゃんつて言つてくれ」

ハウハウ息を荒だてなが喋つたら

「キモ」

引かれてしまつた

ハチマンショック

「良いじやないか言つてやつても」

メリオダスが喋つたら

「団長が言うなら」

息を吸つて

「お兄ちゃん」

「ゴミいちゃん」

喋つてくれた

「ううう」

ハチマンは、涙を流しながら

「ありがとう」

「それは、そうと」

メリオダスが話を曲げ

「ディアンヌ10年前の件で」

「聖騎士長に呼び出された素敵な記念日でしょ」

「オレそのときの記憶がほとんどないだ」

「記憶がないだと」

「最後に覚えてるのは」

八つの大罪は、聖騎士長に呼び出された

皆で聖騎士長の所に会いに行つたら

聖騎士長が殺されていた

そして、聖騎士長殺害の罪を追わされた

八人は、別々に行動した

そして、メリオダスは

「団長、すまない」

「その言葉を最後にぶつかりそして、気づいたらはな穴でホークと出会った
そして、

「嫉妬の罪（サーペント・シン）ディアンヌが力をかすよ」

「そつか助かる

「助かる」

「ありがとうございますディアンヌ様」

「言つとくけどボクが力を貸すのは団長のためだからね」

「俺は」

ハチマンは、呟いたが聞こえなかつた

「良かつたおれたち10年もディアンヌ様に「かくまわないと暴れる」っておどされてん
だいや～ようやくこれで静かに暮らせる」

「苦労してたのな」

「雨雲のニオイ」

「んげ上を見ろ雷雲だ」

上にはデカイ雷雲

から雷が落ち
全員を縛つた

「なんだこれ」

「ううん」

「大丈夫団長」

「しごれて」

「動けねえ」

「ようやく会えたな 〈八つの大罪〉」

そこに現れたのは

「聖騎士」

聖騎士が現れた

4
話

「ようやく会えたな 〈八つの大罪〉」

目の前に聖騎士が現れたその聖騎士は、体に雷を纏つていた
「この力・・・こいつは」

「聖騎士だよなメリオダス」

「ああ・・・間違いねえあれは、聖騎士だな」

〈八つの大罪〉同士で確認をしていたら

エリザベスが声を上げて

「ギルサンダードうしてあなたが」

「エリザベス・・・知り合いか」

「元カレ」ボソッ

ハチマンは、ボソッと喋つたらメリオダスが

「何か言つたかハチマン」

メリオダスは、ハチマンを真顔で見てきた

「別に」

ハチマン目をそらしていると

「彼は聖騎士ギルサンダー・父の側近の聖騎士」

「ギルサンダー? どつかで聞き覚えが」

「昔から私をまるで実の妹のように可愛がつてくれた私にとつても兄のような人なんです」

「なあ、この雷でバーニヤの村水を停めたり、吹き飛ばそうとしたのもお前だろ」

「メリオダス様それは酷い言い掛けりです彼はそんな事できる人じや」

エリザベスは、ギルサンダーを見ると此方をにらみながら魔力で威嚇をしている

「これは、バーニヤで感じた嘘よねあなたがまさか」

「エリザベス王国は、お前の保護を最優先にしている……がわたしには興味のないことお前が死のうと生きようと関係ない」

ギルサンダーは、腕をあげるとエリザベスの雷で拘束されていた雷が消えた

「消えろようがあるのは〈八つの大罪〉のみ」

拘束が解けたエリザベスは、逃げることなくギルサンダーの前に立つた

「彼らに手を出してはなりません早く魔力を解いて自由にしてください」

エリザベスの近くにホークがよつてきた

「俺は、もうダメだ」

「ホークちゃんしつかり」

エリザベスがホークに目を向けた隙にギルサンダーは、近づいてきてホークを蹴り飛ばした

「ぼぎやあああ」

ホークは、蹴り飛ばされた先の木にぶつかり遠くへ飛んで行つた

「ホークちゃん」

エリザベスは、ホークを追いかけていた

その場には、
「八つの大罪」だけが残された

そして、ギルサンダーがメリオダスに近づいてきた時に

「おーい、ギルサンダー俺も、仲間にいれてくれ！」

何処からか声が聞こえてきた

「うるさいぞ」

ギルサンダーは、その謎の声に答えると

空から火の玉が落ちてきた

落ちてきた火の玉により周りの木が燃えた

「良いじゃないかですかギルサンダーさんよ俺も仲間にいれてくれたつて祭りみたいなものじやん」

そこからは、赤い鎧を着て長髪のヘラヘラした男が出てきた

「帰れ。それに俺は祭りは、嫌いだ」

ギルサンダーは、睨んだが全く怯むこともなくヘラヘラとしている

そしてその人は、ギルサンダーの肩に腕を置き

「俺は、リオネス聖騎士グルグリウスだぞよろしく〈八つの大罪〉そして、さような
ら〈八つの大罪〉の皆様」

ハチマンVSグルグリウス

「グルグリウスがお前達〈八つの大罪〉を始末してやるよ」

グルグリウスは、〈八つの大罪〉に刀を向けた

「おいグルグリウス 〈八つの大罪〉は、私が相手をする」

ギルサンダーは、グルグリウスの肩を掴んだ

「まあまあこんなのは、どうギルサンダーがメリオダスで俺は、」
言う終わる前に〈八つの大罪〉に突っ込んで行つた

「ハチマンを狩る」

ハチマンに向かつて刀を刺したがハチマンは、二の腕でカーボードをした。

攻撃したが刺さらずにハチマンは、吹き飛んだ

そしてグルグリウスは、吹き飛んだハチマンを追いかけた

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

「痛つてえ」

「（俺、一人で戦わなきやいけないのかよ）」

ハチマンは、二の腕を擦つてると

「見つけたみたいだ 〈八つの大罪〉 のハチマンさんよ」

グルグリウスは、森の茂みからでてきた

ハチマンとグルグリウスは、睨み合っている

睨み合っている中で最初に口を開けたのは

「俺は、〈八つの大罪〉 のあんたに興味があるんだよ」

口を開けたのは、グルグリウスだった

「〈八つの大罪〉 の中でも情報が少なく 〈八つの大罪〉 も謎の深いヤツだ」

「何が言いつてんだ」

「俺が勝つたらあんたの秘密を教えてくれ」

グルグリウスは、ハチマンに飛び掛かり刀を上から下に落とした

それをハチマンは、後ろに下がり交わして

そのままグルグリウスの顔にパンチをだした

「オラ」

そのパンチは、そのままグルグリウスの顔にあたりそしてグルグリウスは、木の方へ

吹き飛び木に当たった

「流石これくらいは、かわされるか」

グルグリウスは、ケロツとしている

「じゃこれならどうだ」

ハチマンに刀を向けたそして

「炎帝の爆弾」

刀から火の玉が出来そしてハチマンに発射され
ハチマンの目の前で大爆発を起こした

「どうだ俺の魔力 獄炎の味は」

「ゲホッゲホツ」

煙が晴れハチマンは、咳き込みながら出て来た

「危ねえ」

「なら、これならどうだ」

刀を空にあげ

「炎帝の流星群」

刀から大きな火の玉が出て来てそのまま空に放つた
すると火の玉が空から落ちてきた

「まじかよ」

ハチマンは、火の玉をかわしにかわした

「さらにいくぞ」

「炎帝の爆弾」

更に火の玉が増えた

「全弾かわすのか」

「ならもう一度」

刀を上げようとした時

「体が動かない」

「逃げながら俺の影真似の術を使つたんだよ」

「クソ」

ハチマンは、方向転換をした

同じようにグルグリウスも方向転換した

そして、そのまま走り出した

「あのうすいませんこのまま走ると俺」

グルグリウスの走る先には、木がある

「・・・・・・・・」

「イヤちょっと」

そのまま走り木にぶつかり

気絶した

「一丁上がり」

グルグリウスを倒した後に

空にギルサンダーが飛んで行つた

「あつちも上がつたか」

「急ぐか」

ハチマンは、みんなの元へ走つて行つた

仲間の行方

ハチマンが立ち去った数分後

「行つたか」

グルグリウスは、起き上がり首を回した

「木に激突させるとはな」

鎧に着いた汚れを払い

「帰るかな」

「炎帝の先導」

全身に炎が惑いそのまま空へ飛んで行つた

↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓↓

「此方は、終わつたぞ」

ハチマンが戻つてくると

「遅いぞハチマン」

メリオダスが向かえた

「メリオダス肩のケガ大丈夫かよ」

メリオダスは、ギルサンダーの戦いで肩を負傷した

「大丈夫だそれよりバンとキングの居場所がわかつたぞ歩きながら話すぞ」

「ハチマン俺のケガは、無視かよ」

ホークもギルサンダーにより負傷していた

「後でクスリでも塗つてやるよ」

「俺の心配をしてくれるのは、エリザベスちゃんとハチマンだけだ」

ホーク涙を流した

「ハチマンの方は大丈夫だつたか」

「そうですよハチマン様も大丈夫ですか」

ホークとエリザベスが聞いてきた

「服が少し焦げたくらいだ」

「おーい早く行くぞ」

~~~~~

「と言うわけだ」

「成る程」

白夢の森を抜け〈豚の帽子亭〉にいる四人と一匹

ハチマンとメリオダスは、残りの〈八つの大罪〉のバン、キングの話をしていた



「私は、反対です」

エリザベスが反対してきた

「今は、バステ監獄に向かうよりもメリオダス様とハチマン様の手当てが優先では、ないでしようか。そんな体で聖騎士と戦う事になつたら」

「俺は、ほとんどケガしてないし」

ハチマンが喋るとメリオダスは、エリザベスに近づき

「こーすれば治るかも」

エリザベスのスカートに頭を突っ込んだ

「本当ですか」

「うそですよ」

するとメリオダスが戻り

「心配すんななんともねーから」

「少し寝れば治るからおやすみ」

と〈豚の帽子亭〉の中に消えた

そしてエリザベスは、メリオダスのバツクを届けに〈豚の帽子亭〉に入つた

そのあと部屋からエリザベスの声が聞こえ部屋に行つてみるとそこには、倒れたメリ

オダスがいた

～～～～～～～～～～～～～～

場所は、変わり 〈リオネス王国〉

「だから、あんまり怒るなつてドレファス」

先程ハチマンと戦ったグルグリウスが 〈リオネス王国〉に到着した

「なぜ貴様の力がありながら 〈八つの大罪〉に負けて戻つてくるんですか」

そこには、もう一人の聖騎士がいた

「おいおい敬語は、辞めてくれよあんたの方が階級上だろリオネス二大聖騎士長ドレ  
ファス聖騎士長様」

「貴方の実力は、私達より上だろ。本当は、貴方が聖騎士長のはずだつたんですよ」

「だつて聖騎士長に成つたら動けなくなるじやんだからこのままがいいの」

片眼を瞑り頬つぺに指を向け笑顔でドレファスに答えた

そしてグルグリウスは、立ち上がり

「俺戦いに疲れたから寝てくる」

そう言い部屋を出ていた

「待つてください話しは、まだ終わつてない」

それを追うようにドレファスも部屋を出ていた

# 目指せバステ監獄の前に

メリオダスが倒れそれを助けるために

今は、病院に来ている

医者曰く生きるのが不思議なくらいだつた

「メリオダス様。早く良くなつてくださいね」

エリザベスは、メリオダスのタオルを変えている

その中でディアンヌが動き出した

「バステ監獄にはボクが一人で行く」

「俺は、念のため此処に残る」

ディアンヌがバステ監獄に行こうとした時にエリザベスが動き

「待つてください私もお供します」

「行かない方が良いぞ」

それを追つてきたハチマンに止められる

「そうだよ王女さんが出来ることなんてせいぜい団長のタオルをかえて看病することくらいじゃないの」

「そんな言い方あるかい」

「（いつの間になぜ此処にいるホーク）ホーク止めろそんな言い方」

ハチマンは、ホークに言つたがディアンヌは、此方を睨んで

「私も何かメリオダス様の為に力に成りたくて」

「私が聖騎士を止めたいと言つたから（八つの大罪）の所在を探り出すために」

するディアンヌが地面を強く踏み

エリザベス、ホーク、ハチマンが空中に飛んだ

「勘違いするな團長は別にキミのために無茶したんじやない」

「團長はボクにだつて・・・昔からそういう男なんだからね」

昔ディアンヌが巨人族の里を出て一人旅をしていた時つまらないことでどこかの騎

士団と口論になつて

ケンカになる寸前にメリオダスが来た

そしてメリオダスがその騎士団を倒しディアンヌを助けた

「王女さんのようにちいさくも可愛くもない家にも入れないから看病もできないボクに出来ることなんて團長のために戦うそれぐらいだもん」

「私は、聖騎士と戦う力が欲しいです。大切な人たちをこの手で守る力がそうすればメリオダス様ディアンヌ様ハチマン様に迷惑かけることもないのに」

「ボクは・・・小さくなりたいよ」

「じゃ団長のことたんんだよ」

ディアンヌがバステ監獄に向かつて行こうとした時に

「バステ監獄の空が黒いどんどんこつちに移動してくる」

「雨雲まさかギルサンダージャ」

「違うぞホークあれは、毒虫の大群だぞ」

しかも毒が酸性だ

石像に掛けられた毒で石像が溶けている

「バステ監獄からの攻撃だよな此処は、ディアンヌ頼んだぞ」

「キヤアアアアツボク虫嫌い」

その場に座り込み叫んだ

「どうするんだよディアンヌこのままだとこの町は、全滅だぜ」

エリザベスがメリオダスのいる病院を見て

「メリオダス様」

エリザベスは、虫の攻撃をしてるなかでメリオダスの元へ行つた

「無茶すんなエリザベスちゃん」

「ホーク俺もいるぞ」

「こうなつたらハチマン頼むぞ」

「よし行くぞ」

ハチマンの影が円型になり

「影抜い」

円型の影から針型の影が飛び出し出来て空にいる毒虫を殺した

「ハチマンまだ何匹か残つてるぞ」

「もう一発行く」

ハチマンがもう一度やろうとした時にディアンヌが立ち上がり

「虫は、嫌いだけど団長のためなら何でもないよ」

地面が飛び出して来て残りの毒虫を殺した

そして、ディアンヌそのままバステ監獄に走り出して行つた

「団長のことは、頼んだよ」

「任せろディアンヌ」

「あのハチマン様これがディアンヌ様の力ですか」

「そうあればディアンヌの魔力クリエイション—創造。地と密接な関係がある巨人族特有の魔力で、飴細工をするかのごとく鉄を捻じ曲げ、地層を塔のように隆起させて自在に操ることがで

きる。らしいぞ」

解説をしていると家の屋根からハチマンめがけて円錐状の武器が飛んできた  
「影抜い」

飛んできた武器を影抜いで刺して止めた

「誰だそこにいるのは」

そこから出てきたのは

「私の名前は〈不気味な牙〉<sup>（ウイアード・ファング）</sup>が一人聖騎士ジユド」

# 聖騎士とバトル

目の前に聖騎士が現れた

「ホーク、エリザベス逃げろ」

ハチマンは、ホーク、エリザベスを病院へ逃がした

「お前達には、此処で死んでもらう」

円錐状の武器をハチマンに飛ばしてきたがハチマンは

「影抜い」

影抜いは、そのまま聖騎士に刺さつた

「グハツ」

血を吐きその場に倒れた

「え、終わりかよこの間の聖騎士の方が強かつたな」

ハチマンは、聖騎士に近付き

影に触り

「なるほどな」

すると病院の方から窓ガラスが割る音が聞こえた

ハチマンは、その場所に走った

病院に付くとメリオダス達に会った

「どうしたんだ窓が割れてるぞ」

「いや、それがよ聖騎士に襲われかけてよそつちは」

「俺の所に来た聖騎士は、倒した」

「さすがだなハチマン」

メリオダスと喋っていると病院のダナ医師が来た

「ゴルギウス様そこにおられましたか少年を殺すことは失敗しましたが言われた通りに  
毒を飲ませました」

「あのクソ医者」

「約束通り娘を返してください」

「声を荒らげるな娘はお前の元に返してやろう」

「ヤバい!!」

「あの世でな」

ハチマンは、飛び出しダナ医師を横に倒し

そしてハチマンの目の前に聖騎士が現れハチマンの胸骨部に刀で貫かれた

「まず一人目」

「ハチマン様ー」

「ハチマン」

「！」

エリザベス、ホークが心配したがダナ医師は、驚いていた

「ゴルギウス離れた方が良いぞ」

「なぜ」

するとハチマンは、刀が刺さったままゴルギウスの顔面を殴つた

「な、なぜ胸を刺されても生きてるんだ」

刺さつた胸の所を見ると黒くなつていた

「刀は、返す」

刀をゴルギウスに投げ

ゴルギウスは、これをキヤツチした

「それは、だねゴルギウスちゃん」

メリオダスが解説シャドーに入つた

「ハチマンの魔力 影の力の一つシャドーマンによるものだハチマンは、自分の影を実体化させ戦わせることが出来るそして、ハチマン本人が斬られそうになつた部分にシャドーマンと自分の部分を取り替えることが出来るだからハチマン本人は、無傷」

「クソ」

すると聖騎士ゴルギウスの姿が見えなくなつた

「おいおい、まさかアイツの魔力つて瞬間移動じやねえの」

「賢い豚さんですね私の魔力は、瞬間移動ですよあなたは、もう一度と私をとらえる」と  
は、できませんよ。あれ、あの男は何処に行つたn」

ゴルギウスは、喋つてる途中で殴られた

壁に吹き飛び姿が見えてきた

「誰だ私の喋つて途中で殴つたのは」

「俺」

ゴルギウスを殴つたのは、ハチマンだった

「バカなさつきまでそこにいたはずなのに」

ハチマンを睨み付け

「また貴様の魔力か」

「今回は、魔力は関係ない」

「なら一休」

「これは、俺の特技ステルスヒッキーだ。

自分の影を薄くし存在を消すことが出来る（まさか此処で俺の長年ボッチをやつてい

て会得したボッヂスキルが使えるとは、思わなかつたな」

「心の声漏れでますよハチマンさんエリザベス達驚いてるぞ」

「クソ」

やけくそになり真正面から来た

「シャドーパンチ」

ハチマンの拳から影の拳が現れゴルギウスを殴りぶつ飛ばした

「ごはつぐつ・・・おおおつがはつ・・・」

「さてさてさーて・・・答えてもらおうかなゴルギウスちゃんお前が「俺の剣とエリザベ

スを狙う理由」とそれを「誰が命令したのか」

メリオダスがハチマンの前に立ちゴルギウスに質問し始めた

「メリオダス」

「一時はどうなるかと思つたぜ」

「あ!!」

「ありやまにげちまつたタフなヤツ」

そこへ馬が走つてきた

「なんだ馬かよさつきの轟音にビビッたんだな臆病な動物だぜ」

「あそこだな」

「ああ」

ハチマンとメリオダスが馬を見て言った

「メリオダス俺は、先にバステ監獄に向かうからな」

「了解」

ハチマンは、自分の影を実体化させその影に乗り空へ飛んでいった

# 到着バステ監獄と新たな仲間

ハチマンは、自分の影を実体化させその影に乗りバステ監獄に到着した

「（到着）」

「ハチマンは、バステ監獄の所々穴が空いている所から中に忍び込んだ（ステルスヒックキーを活用して進むか）」

しかし進んでも進んでも敵の聖騎士や騎士が現れない  
「（外には、たくさんいたんだけどな）」

ハチマンは、一人で進んでいると人影が前方に見える  
その人影が見えてきたそれは

「バン」

「ハチマン」

「八つの大罪」の一人強欲の罪バンだつた

そしてバンは

「ハチマン♪♪」

笑いながらハチマンに抱きついてきた

「離れる気色悪い」

ハチマンは、バンを引き離す  
バンは、素直に戻り

「久しぶりだな♪」  
「久しぶり」

「で、何しに来たんだ♪」

「お前を助けに来たが無駄だつたな」

「自分で逃げたけどありがとうよ助けに来てくれて♪」

バンは、ハチマンの肩に手を置いた

すると

物凄い轟音が聞こえたそしてバステ監獄自体も揺れた

「団長も到着したのかな♪」

「来たみたいだな早く合流するぞ」

前に進もうとした時にバンが肩を叩き

「なな、ハチマン何で俺の場所すぐ分かつたんだ♪」

「俺の技の一つ記憶探し。相手の影を触れば見たこと聞いたことがわかる

「相変わらずすげえなお前は♪」

「早く行くぞバン」

二人は、しばらく歩き

そしてとうとう

「あ、団長」

「バン」

メリオダス達と再開した

「団長♪♪

「バン」

二人は、近づき手と手を叩き合つてその後から

殴りあいが始まつた

バンがメリオダスを殴ると吹き飛び壁を突き破つて行き

そのお返しに今度は、メリオダスがバンに頭突きをすると同じように吹き飛び壁を突

き破つて行つた

二人は、それをしばらく続けている

そしてハチマンは、ディアンヌ達の方に行き

「お前ら大丈夫か」

「ボクは、大丈夫」

ハチマンが質問するとホークが怒り

「大丈夫じやねえ見ろあの二人」

ホークがさす指の先には、まだメリオダスとバンが殴り合いをしている

「いつものことだ心配するな」

「しかもお前が先に行つたから色々と大変な目に会つたんだぞエリザベスちゃんは、怪

我するしよ」

「エリザベスは、何処に」

「ディアンヌの鞄の中だよ」

「レディ・・・」

一人は、腕相撲を始めた

「ヤバい」

「ゴツ!!!」

二人の腕相撲によりバステ監獄が崩れ始めてきた

「ホーク此方に来い」

ハチマンは、ホークを引つ張り

「シャドーボックス」

ハチマンの周りに立方体の黒い箱ができハチマンとホークは、黒い箱の中に入つた

「なんだこれ」

「俺の技の一ツシャドーボックス外からの攻撃を防いでくれる」  
シャドーボックスは、瓦礫の衝撃から守りバステ監獄が完全に崩壊した  
「解除」

ハチマンが解除するとシャドーボックスは、消えた  
中にいたハチマン、ホークは、無傷

「何で僕は、助けてくれなかつたの」

デイアンヌは、ハチマンのシャドーボックスには、入つていなかつたのだ  
「悪いデイアンヌ俺の今の力じやまだデイアンヌを包みこめるほどの大きなのは、作れ  
ないんだよ」

デイアンヌは、一様それに納得した

「夕方になつてるしょ」

「帰つて飯だな」

「お腹すいたしね」

「とりあえずまあ～なんだ・・・団ちよ達にまた会えて嬉しいぜ～♪」

メリオダス達は、村に戻り

エリザベスの手当てをした

「おいハチマンお前手当て出来るのか」

「ホーク俺は、医者じゃない軽い手当て程度だ」

すると後ろから

「私にも手当てをさせてください」

ダナ先生が来た

「お願いします」

「ハチマンくんあの時は、私を助けてくれありがとう私も娘を人質に取られていてしかも娘までも助けていただきなんてお礼を言つて良いのか」

「いえ別に気にしてませんよ」

「そうかならこの手当てが終わつたら食事くらい礼をさせて欲しい」

「それじゃお言葉に甘えさせていただきます」

二人は、手当てをし続けた

そして手当てが終わり食事が始まつた

「さて・・・とエリザベス改めて紹介する強欲の罪バンだ」

「まゝヨロシクたのむわ♪」

「ん? その服は、どうしてバン」

バンは、ハチマンとバステ監獄で出会つた時には、上半身裸だつた

「王女様の御前で裸でいるわけには、いかねーだろ♪」

「お前服買う金なんて持つてたのかよ?」

「落ちてたんだよたまたま偶然」

ディアンヌは、やれやれとため息をつき

エリザベスは、クスクスと笑つている

ハチマンは、バンが盗んできたんだろうなと思つていた

「そういえばディアンヌも久しぶりだな」

ディアンヌは、そっぽを向き

「ボクは、もう百年キミと会わなくともよかつたんだけど?」

「いや百年つてもしハチマンだつたら死んじやてるよまさかディアンヌも俺と百年会  
いたくなかったとかハチマン泣いちやうよ」

「声出てるぞハチマン♪」

「マジ」

「大丈夫バンとは、百年会いたくなかったけどハチマンは、そこまでじゃないから」

「(えー)マジそんなこと言われたら照れちゃう」

「だからハチマン声出てるぞ♪」

「もうハチマンだつたら冗談好きなんだから」

バンは、小馬鹿にして笑つてゐる

デイアンヌは、ハチマンの言葉を冗談だと思い笑つてゐる

「(なぜ声が出てるんだ)」

「ハチマン様は、隠し事は苦手なんですね」

エリザベスにも笑われた

笑えるほどの元氣があれば言いか

バンは、エリザベスに近づき

「エリザベスです・・・こんな格好で申し訳ありません」

「いえいえ王女様へ八つの大罪（うちら）」はいつでも無礼講だ五人仲良くしよーぜ?」

「六人だろ。六人」

声が聞こえた

バンは、辺りを見渡すがメリオダスが喋つたと思い

「ボケんなよ団ちよ五人だろゝが♪」

かつかつと笑いながら喋るがメリオダスは、手を振り喋つてないとアピールする

「しつかしとんだイカレ野郎だぜ仲間とはぐれて暇だから監獄にとつ捕まつてたとか仲間が生きてるとわかつた途端に脱獄・・・あげくにぶつ壊しちまうんだ頭のネジゆるみすぎじゃね?」

「・・・誰だ？」

バンは、声が聞こえた方を睨み付けたがその先にいたのは  
「俺だ!!」

ホークだった

バンは、ホークをしばらく見て

「豚が喋ってる！」

バンは、驚き後ろへ下がった

「今更ここでびびるか」

「うそだろゝ人の言葉を喋る豚なんてよ全くの無意味だろ」

バンの言葉は、ホークの心に刺さつた

「てつきりディアンヌの飯とばかり」

「なんですぐ人を食用豚にする」

「言つとくが俺は、ただの豚じやねえ残飯処理騎士団長ホークだ」

「すげ〜♪全く聞いたことねえ」

ホークのこと信じた

それを聞いてハチマンは

「バンこいつの妄想だからな」

そしてダナ先生が来た

「さあみんなどんどん食べててくれ」

「本当にいいの」

「ディアンヌは、遠慮しているが

「もちろん遠慮なくどうぞ」

「君だけ一人立食ですまないね」

「大丈夫」

「ディアンヌ椅子ぐらいなら俺の力で作ろうか」

ハチマンは、ディアンヌに聞いた

「本当じゃお願い

「じゃ行くぞ」

ハチマンは、手をかざしするとディアンヌの下の影が立体になり椅子の形になつた

「ありがとう」

ディアンヌは、その椅子に座つた

そして宴会が始まつた

飲み食いをしていると

「空が」

「これはまるでブリタニアの古い歌の一節の・・・一天を流星が十字に斬り裂く時ブリタニアを至大の脅威が見舞うそれは古より定められし試練にて光の導き手と黒き血脉の聖戦の始まりの兆しとならん」

# もう一人の大罪人

ダルマリーの町を後にした〈八つの大罪〉達は、死者の都に一番近いと言われている集落に来ている

「寂れたところだなハチマン♪」

「まずは、キングと『死者の都』に関する情報集めだ」

「それと当面のメシ代を稼がねーとな」

「早速開店準備だ」

「マジで団ちよが店ちよやつてるよ♪」

バンは、バカにした顔で言っている

当然だメリオダスは、料理が下手くそだからだ

「働く団長もス・テ・キ」

ディアンヌは、頬を染めながら言っている

「お前らも働くんだぞ」

「呼び込みは任せたぞ大看板娘」

「ボク」

「うまいメシを頼んだぞ脱獄料理人」

「俺が?」

「(パンが料理人ならこれで俺は、 働かなくてすむ)」  
ガツツボーズをしていると

「そしてもう一人頼んだぞ腐り目料理長」

「俺もかよ」

「(何で働くべきやいけないんだよパンがいるだろうがメリオダスはメリオダスで料理  
が由比ヶ浜よりひどいってどんなレベルだよそのくせ見た目は、凄くうまそうなのが余  
計に腹が立つ)」

「お前働いたら負けだと思つてるくせによ思ひ切り働いてんじやねえかよ♪」

「(そうだ働いたら負けなんだ)」

「クサいメシじやいのかよ」

「上手い・・・と言ひが本当な話これが上手いんだな」

「じゃハチマンとパンどつちが旨いんだ」

「それはだな」

「100戦53勝47敗でハチマンの方が旨いしかもハチマンいまだに本気で料理して  
ないんだよ」

「マジかよ俺がいつも食っているのは、まだ本気出してないのかつまり本気を出せばもつと旨い残飯が食えるのか」

ホークは、目をキラキラさせてハチマンを見てくる

「さあつ仕事だじやんじやん働こう」

メリオダスは、手をパンパンと二回叩いた

「あの・・・私にもウェイトレスの仕事をさせてくださいもうケガもなんともありません」エリザベスには、聖騎士にケガを負わされ未だに絆創膏や包帯を巻いている状態でいる

る

「（そんなに働きたいのかよすげえなお前はうらやましいよハチマンには到底真似できない。まあ新しくバンも入ったから俺の代わりに仕事を押し付けてやる）」

「バン食料庫は店の裏に回つて・・・つてバン」

バンの姿がなかつた

「逃げられたな大変だな腐り目料理長」

「（クソ、バンのヤツめ逃げやがつてしかもディアンヌ宣伝間違つてるぞ）」

ディアンヌは、外で

「おいしいお酒かわいい看板娘がお出迎えの豚の丸焼き亭だよいっぱいサービスしちゃうぞ」

〈豚の帽子亭〉のことを〈豚の丸焼き亭〉と間違っているその間違いをホークはツツコミ  
「帽子亭な」

帽子亭など教えている

しぶしぶテーブルなどをみんなで拭いていると

「キング様つてどんな方なんですか?」

「そうだなーどんなって・・・一言で言えば〈八つの大罪〉のマスコット・・・ペツト的な位置?」

「オイオイペツトは勘弁しろつて飲食店で畜生を飼うつてどんなわけ」

「ホーク自分を鏡で見てこい」

ハチマンが開店準備をしながら言うと続いてメリオダスが

「そういう意味じやないぞ」

「あ・・・キングと言えばたしか昔バンの奴がぬいぐるみ集めにハマったとき」「プツ」

「かわいいなソレ」

メリオダスが過去の話をしている中でハチマンは、ハチマンで思い出していた  
「(確かにバンがリオネス中のぬいぐるみを強奪してきてそれを聞いたキングが怒り泣き  
出したんだつけなそしてバンが寝た時にぬいぐるみを返したんだけな)」

「少し変わってるみたいですがどとても心の優しいとても心の優しい方なんですねキン  
グ様つて」

「それに引きかえバンは本当ろくでなしだな相当二人は仲悪かつだろ」  
「それがどうしてバンがそんな奴だからその尻拭いのためになるのかしよつちゅうバン  
の後ろをキングがついて回つてたつけなま、なんだかんだ良いコンビだつたんじやねー  
の？」

「まあ、仲良かつたのは、ハチマンとだつたなハチマン」  
「ある程度な」

「そうなのかよハチマン」

「そうなんですかハチマン様」

「そうなんだよハチマン」

「メリオダスが返すなよあと開店準備しろお前ら（俺一人じやねえかよ）」

メリオダスは、ハチマンの言つたことを無視して

「それでも客が来ねえな」

「ハチマンの話聞いてくれてる？」

「バンを探しに行くぞ」

みんなでバンを探すことになつた

そしてみんなで探しているとメリオダスが先に気付いた  
そこにいたのは、バンと子供がいた

「「キング」」

キングがいた

「あれの何処がキングなんだ」

バンが大声を出した

「どつから見てもキングだろ」

昔のキングは、中年のおっさんの見た目だか今は、子供だつた

「キングボクたちみんなキングのことを探してたんだ」

「久しぶりだなキング」

ディアンヌとハチマンがキングに喋ったが逃げるよう飛んでいった

そしてバンか店を抜け出した時に出会った少年少女を豚の帽子亭に連れてきて  
死者の都への行き方を聞き出そうとした

情報を聞き出すかわりにバンは、料理を出した

そしてそれを情報を聞き出すことに成功したそれは

『何にもかえがたい死者との思い出が都へといざなう・・・』

みんなで死者の都に行くことになつたがまさかのハチマンは、店番だつた

「ひまだ〜」

ハチマンは、メリオダスから年のために店番を任せられたが客は一向に来ずにそのまま眠つてしまつたそしてハチマンは、ある夢を見ていた

そしてハチマンが寝ていると

「Z z z z z」

「おきろー」

メリオダスの声で目が覚めた

「何に店番をしないで寝てるんだよ」

「悪い」

見てみるとкиングもいた

そしてкиングがハチマンに近づき

「ハチマン大丈夫かい泣いてるけどどうしたんだい」

киングが心配そうに近づいた

そしてハチマンは、目から涙が流れていった

「いや、少し夢を見てな」

「ハチマンが大丈夫なら良いんだけど」

その後メリオダスに少し怒られた後に死者の都で起きたことを聞いた死者の都で聖

騎士が現れまだこの集落に仮死状態でいるのでこの場から離れ違う場所へ向かつた  
そして向かつた先でキングが仲間に戻つたことで宴会が始まつた

「成る程その聖騎士にボロボロにされたと」

ハチマンは、話を全て聞きメリオダス達に話をしている

「あの聖騎士はなかなか手強い相手だつたけど本来の力なら倒せたハズだろ」  
「三人とも神器はどうしたの」

「失くしちゃつた」

「売つちやつた」

ディアンヌ、メリオダス、バンの順で喋つた

それを聞いたキングは、怒り

「ありえない〈八つの大罪〉結成時にリオネス王国国王から賜つた神器を」

「売つた」

「店の資金の為に」

メリオダスはヘラヘラしながら

「盗まれた」

「投獄された時にな♪♪」

パンは、酒に酔いながら答えた

そしてディアンヌは涙目になつてゐる

「失くしちやつたものは仕方ないよね」

「ボクつてばダメな娘」

「そんなことないよ」

ため息をつき

「ハチマンを見習つてよ」

ハチマンは恐る恐る

「悪いキング俺も売つちやつた」

「ハチマンまで何やつてんの」

「八つの大罪」の情報を集めるために店の資金へと

そのまま宴会が進み夜になつた

そしてハチマンは、一人で外にいるとキングがハチマンの横に来て

「隣大丈夫かいハチマン」

キングを見ながら

「大丈夫だ」

「久しぶりだなキングこうしてお前と二人で喋るのは」

ハチマンは、前からキングとよく二人で喋っていた  
「そうだねキミとは、よく話が合うからね」  
キングは、ハチマンの顔を覗き

「どんな夢を見たの」

「どんな夢を見たのってそれは・・・

# 夢の話

「どんな夢を見たのって・・・それは俺がいた世界の夢をな」

「俺が店番を一人だつた客も来ずに暇だつた為に俺は、眠つてしまつた・・・

~~~~~

「(なんだ)」

ハチマンが目を開くとそこには、見覚えがある天井が広がつてた

「(此処つて俺の家)」

ハチマンが生まれ育つた世界に入る

「今までのは、夢だつたのか」

ハチマキは、ベッドから飛び起き下にいる小町に合いに行こうとし扉を開くいた
「小町!!」

がそこには、ハチマンの遺影に手お会わせていた

「行つてくるねお兄ちゃん」

小町は、ハチマンが見えなくそのまま通りすぎつて行つた

「見えないのか?」

「(そういうえば)」

『何にもがえがたい死者との思い出が都へといざなう・・・』

死者の都に行く方法を教えて貰つた言葉を思い出した

「(まさか、何らかの理由で俺の魂だけが此方にこれたのか)」

その前考えハチマンは、自分の学校千葉市立総武高等学校に向かつた

そして自分の教室の前に到着したハチマンは

「久しぶりだなこの教室も(どうなつてるだらうな俺の席は・・・行くか)」

ハチマンが勇気を振り絞り教室に入るとそこには、自分の席にハチマンの好きなMA

Xコーヒ一が置いてあつた

そして席の周辺にいたのは

「由比ヶ浜、戸塚、川崎、材木座」

その四人は、ハチマンの席で合掌をしていた

そしてその4人の声が頭の中に聞こえてきた

「(ヒツキーキのうねすごくおもしろいテレビばんぐみやつてたんだ)」

「(八幡この間ねテニスの練習試合でね勝つことができたんだ)」

「(またお前と遊びたいってねーちゃんがね言つたんだよ)」

「(八幡よこの我是、小説を投稿してみようと思うのだかどうだらうかな)」

それを聞いたハチマンは

「（俺に祈つてゐる声が聞こえるのか）」

「（お前は、相変わらずだな）」

「（戸塚テニスの練習試合に勝つことができたんだな良かつたよ）」

「（川崎そのことは、上手く誤魔化してくれよな）」

「（材木座は・・・まあ頑張れよ）」

ハチマンは、一人一人に返事を返した

その後は、ハチマンも他の生徒と同じように授業を受けた

そして放課後になりハチマンの足は自然と奉仕部の部室の前に立つていた

ハチマンは、意を決して部室に入るとそこには、いつも通りに雪ノ下は本を読んでい

る

いつもと違うところが合つた

それは、ハチマンの座つていた席に写真の前にお茶が出されていた

ハチマンは、そのまま座つていた席に座つた

「（久しぶりだなこの席）

しばらくしていると部室の扉が開き

「（ども）」

一色が部室に来た

「ノックしてつていつも言つてるでしょ」

「すいませーん」

「(この感じも久しぶりだな)」

その後に一色は写真の前に立ち合掌をした

「(せんぱーい元気にしてますか私は、元気にしてますよどうせあの世でもひねくれつて
るんでしょ)」

「(ハアー相変わらずだな)」

一色は、そのまま写真に手を合わせたらそのまま生徒会に戻つていた

そして時間が流れた

部活が終わり雪ノ下が帰ると思ったハチマンは、立ち上がり部室を出ようとしたとき
に

雪ノ下が

「また明日ね比企谷くん」

写真に向けて喋つた後に雪ノ下は、部室を出つて行つた

ハチマンは、その言葉を聞き驚いた

「(お前らしくないな)」

ハチマンは、今日1日を思い出した
自分が死んで皆が悲しみを抱いてくれてることに
「(本当を見つけたのかな)」

そう思い目を閉じた

後に

「おきろー」

～～～～～～～～～～～～

「それで目が覚めただよ」

キングに夢で起きたことを話した

「悪いな話長くなつてもう遅いし俺寝るじやあなキング」

部屋に戻ろうとした時にキングが

「皆本気でキミを心配してくれてるみたいだね良い友達を持つたね」

そう言つた

ケンカ祭り

ハチマンは、キングに夢の話をした

翌日

八つの大罪は、次の町へと来ている

「あの山の斜面にへばりついているのが『バイゼル』いわゆる商人の町で今日は年に一度の古物市祭をやるんだ」

メリオダスがバイゼルの町の紹介をしているとその横からハチマンは

「そしてその祭りの時にどこぞの王家の王冠まで出回ったことがあるらしい。そしてその中に今年は、『誰にも扱えない武器』を買つちまたつてボヤいてるバイゼルの商人がいるらしい」

それを聞いたホーク、エリザベスは

「誰にも」

「扱えない武器」

「神器」

「おそらくな」

「凄いです。ハチマン様」

「いや、この情うお

ハチマンが喋つてる途中でメリオダスが膝カツクンをされ変な声が出たそしてそのまま膝を地面に着いた
「ハチマンこの情報は、俺が手に入れたのになぜお前一人だけの手柄みたいになつてるだよ」

メリオダスは、ハチマンの頭をグリグリしながら喋つてゐる

「だからこの話は、メリオダスが聞き出したつて言おうとしたろそれをお前が膝カツクンで邪魔したんだろ」

その話を聞いたメリオダスは、グリグリを辞めた

「それを早く言えよ」

「ハアー俺先に行つてるぞ」

「団ちよくそんなことよか俺の服をなんとかしてくれよ」

「裸にエプロンでもつけてろよ」

あの二人は、何つて話をしてるんだよ

ハチマンは、メリオダス達より早く町に着いたそして誰にも扱えない武器の情報を元にその場所に行つた

「（これだなディアンヌの神器は）
ディアンヌの神器を見ていると

「見つけたぞハチ」

「（ハチその言い方はメリオダスか）」

ハチマンは、人混みなどの時に〈八つの大罪〉だとばれないようにするために言わ
れている

メリオダスに見つかったハチマンは、エリザベス、ディアンヌがいないことにきずき
メリオダスに質問した

「二人は、どうした」

「二人か一人は、この町で巨人族が暴れてディアンヌが残りでその付き添いでエリザベ
スも残つたんだよ」

「へー」

ハチマンは、軽い返事を返した

「それは、そうとこれからケンカ祭りが開催されるからよお前も登録しとおいたぜ」
「（え、ちょっと待つて断りもせずにかよ俺目立つのとか好きじやないんだけどな）」

ハチマンは、ケンカ祭りのリングに引っ張られたそして

「ケンカ祭り開始」

「・・・・・」

見つからないように隠れている

「（俺が手を出さなくとも倒していくなら見ていいだけ良いいで楽それにしてもあの選手スゲエな）」

そしてその選手の中で一際目立っているものがいた帽子を被りマントを着ている女性だった

その選手は、あつという間に十数人を一人で片付けた

「あいつやるな」

「おー怖つ嫁の貰い手があるのかね」

メリオダスとバンの話してハチマンは、思つた

「（嫁の貰い手か平塚先生大丈夫かな）」

自分の先生が結婚できなくて悩んでいるのを思い出した

「残つた人数は9人」

観客がざわざわし始めた

「どーするんだよ？トーナメント出来ないだろ」

「いや！もう一人落ちてないやつが」

その方向を見るとそこには

「あ、危なかつた」

神器で落ちていかないキングがいた

「卑怯だろ浮いてるなんて」

野次を飛ばすが審判の判断はセーフだつた

だがしかし卑怯で勝ったためメリオダスとバンにいじられた

本戦は10分後に始まる

そして本戦が始まる前に対戦相手を決めるくじ引きがはし始まつた
結果は

グリアモール対マトローナ

ハウザー対タイズー

ケイン対おっさん

メリオダフ対バーン

そしてシードのヒツキー対グリグラ

「おっさんって誰」

「オタクですよ」

バンが名前の登録をしたために変な名前が存在した

「酷いよねハチ……ヒツキー」「ヒツキーか……」

由比ヶ浜につけられていたあだ名を此処で思い出すことになつたハチマンだった
そしてハチマンの対戦相手は
「俺このケンカ祭りで優勝したら告白するんだ」と言つている

グリグラとハチマンのケンカ

「聞いてよハチマンおっさんって酷いよね」

キングは、バンにつけられたおっさんって名前が酷かつた為に落ち込んで、ハチマンに話を聞いてもらいたい為に話をしかけているが

「まだ言つてるのかよ」

ハチマンには、飽きられていた

「だつてさ」

「たかがおっさん位だろ俺のあだ名の方が凄いぞ聞きたいか」

ハチマンは、いつも目が腐っているが自分のトラウマの話をしようとしているため目がいつもより腐っている目をしているその目でキングを見ると

「例えばな俺は、比企谷だよなだからヒキガエルとかつけられていたまあ、最終的にはヒキが抜けてだだのカエルに成つたり他には、」

「いや、もう大丈夫」

キングは、その目と話に驚き引き下がった

「そうかよ」

俺のトラウマの話さぞ怖かつたろキング

二人が話していると第一回戦が始まる

「ケンカ祭り第一回戦マトローナ対グリアモール開始」

「キング俺眠いからお前の神器貸してくれ」

「分かった」

キングの神器は、複数の形態を持つていてこの中で相手の打撃を吸収する形態があり
それは、寝具としても使えるため時々ハチマンは、寝具にしている

そして、しばらくしてキングに起こされた

「起きなよハチマン」

「ん、ああ」

目を開けるとそこには、いるはずのない人がいる

「何で、ディアンヌが此処にいるんだよ」

「それわね」

ディアンヌがいる理由は、食料調達の時にキノコ型のモンスターに小さく成つたらし

いそれを利用してこのケンカ祭りに参加したらしい

そしてエリザベスは、メリオダスの手の上にいる

「成る程なそう言えば試合の結果はどう成つてるだ」

その質問にメリオダスは、答えてくれた

「それわだな一回戦目は当然のようにディアンヌの勝ちで二回戦目は実は聖騎士だつたハウザー三回戦目は武器を持つてなかつたら弱いキングが負けケインの勝ちで最後は当然のよう俺の勝ちだ」

ハチマンが寝ていた時の結果を教えてくれた

そしてハチマンはキングが負けた事を慰めるように肩に手を置き

「まあ、キング気にするなよお前は、武力じやないからな魔力が高いからな」

「慰めありがとうねハチマン」

「じゃあ俺は、そろそろ行くかな」

そして、ハチマンの戦いが始まる

試合の上に立つとハチマンとグリグラはにらみ合い

「では、続いて第五回線ヒツキー対グリグラの開始」

「行くぞ」

開始と同時にグリグラは、ハチマン目掛けて走つて來たが足の速さが驚く歩とに

遅かった

「「足おつそ」」

回りの観客も一緒にツツコミを入れた

「何だよあの試合と言いつこの試合と言いつ」

観客の一部は呆れているものいる

「キングと良い勝負だ」

「やめてよね団長」

メリオダスとキングが喋つてる内にグリグラは、ハチマンの所にたどり着き

「かぐじしろ」

ハチマンを殴ろうとしたがハチマンはその拳を掴みそのまま場外へ出した

「第五回線勝者は、ヒツキー」

「まあおつかれヒツキー」

「おう」

ハチマンは、次へと駒を進めた

敵襲ケンカ祭り

マトローナ対ハウザーの勝負は、マトローナの勝ち
ケイン対メリオダフの勝負は、メリオダフの勝ちだった
そしてハチマンの戦いが始まる

「え、いきなりの展開だつて気にしないでべ別にめんどくさいとかじやないんだからね
準々決勝メリオダフ対ヒツキー」

そしてメリオダフとヒツキーは、リングの上に立つた

「お前とかヒツキー」

「後は、誰が勝つても良いから俺降りるぞ」

「勝負を逃げたらお前一ヶ月間休みなしなそして俺に勝てたら一週間の休みをやろうどうだ」

「(まじで一週間の間俺休めちゃうのじや頑張らなきやな交渉なかなかだな)」

「こい、メリオダフ」

「それでは、試合開始」

開始と同時にメリオダスは、ハチマンの腹を殴りに行つたが

違和感を感じたメリオダスは、下がつた

「やろう」

メリオダスが殴つてたと頃は、黒い影で覆われていた
「休みをもらうぞ」

ハチマンが飛びだしメリオダスの顔を殴ろうとしたがいきなり寸止めをした
それに対し観客がヤジをとばした

「何で止めるんだよ茶番ならやめろ」

そして、キング、ディアンヌ、バンがリングへと上がり三人は、メリオダスとハチマンの近くへと行き

「いいだろう。茶番をやめてやる」

「俺の正体は八つの大罪団長 憤怒の罪メリオダスだ。」

メリオダス、ハチマン、ディアンヌ、バン、キングは観客をにらみ

「あと一分以内に町から消え失せろ。さもないと七つの大罪が皆殺しにする。」

それを聞いた観客が達が騒ぎ始めた

ざわ…ざわ…ざわ…ざわ…

一向に逃げる気配がなくしていると

空から大きな火の玉が落ちてきた

メリオダスは、その火の玉目掛けて飛んだそして

『フルカウンターフルカウンターワーク
全反射』

全反射を使い攻撃を防いだ

「俺らを守ったのか」

「でもよ皆殺しにするつて」

逃げる気配がなく騒いでいる観客にしごれを切らしたメリオダスが大きな声で叫んだ

「いいから早く逃げろ」

するとさつきは、一個だつた火の玉が何個も降つてきた

「俺一人じや対処できねハチマン頼む」

「分かつてる」

『シャドーシールド』

するとハチマンの影から何個も盾が出て来て火の玉を防いだ

ハチマン一つの提案を出した

「別れて行動するぞ」

その提案を飲んだ八つの大罪は、別れた

そしてメリオダスが先に進んで火の玉が来た方へと向かつた

そしてハチマンは、メリオダスが行つた所と違う方へと行つた
俺の勘が此処だと言つてゐるが

すると岩の後ろから声が聞こえてきた

「何だ何か聞こえる」

「決定。一人死亡」

岩の向こう側から斬撃が飛んできた

がハチマンは、それをいとも簡単にとかわした

そしてその斬撃をとばしたもののが岩の後ろにいたらしく此方に歩いてきた

「なぜ私の決定事項を破るのだ」

「（え）何コイツ自分が世界の中心だとでも思つてるのかよ俺が嫌うタイプの一人だ
な）」

「貴様ら八つの大罪は、何回私の決定事項を消し去るのだ気に入らんだから此処で死ね」
ハチマンは、攻撃をしてくる前に先に攻撃を仕掛けた

『シャドーパンチ』

するとハチマンの影から拳が出てきてそのまま顔面を殴り飛ばした
そしてそのまま追い討ちを掛ける

「これで終わりだな『シャドーボール』

ハチマンの手から黒い球体状のが出てきたそしてそれを敵に投げた
「手加減は、しておいたぜ」

シャドーボール当たりそのまま爆発した

「これで再起不能リタイアだなってかアイツの名前何度ろうな」
 すると後ろから答えが帰つて来た

「それはだねハチマンくんツイーゴつて言うんだよ分かつたかね」

ハチマンは、倒したと思つてる為に質問の答えが帰つて来たのに驚き後ろを振り向いた

そこに立つていたのは、ハチマンと戦つたグリグラだつた
 しかも片手だけで受け止めていた

ハチマンは、驚き沈黙になつていた

「あれ、俺の事を忘れちゃったかな。あつそうかこの顔のままじゃ分からぬよね」
 すると顔が徐々に変わりそしてハチマンが驚き

「お前は・・・」

「そう、白夢の森で戦つたこの俺グルグリウスだつ」
 親指を自分に向け立てつている

「どけ、この私がこの男を倒す」

ツイーゴが声を荒げて言うとグルグリウスは、振り返り

「これは、譲らないからじやあね」

ツイーゴの頭を掴み投げ飛ばした

「さあ、これで邪魔が入らなくなつたねではラウンド2ハチマンVSグルグリウスの試合を開始するウウウウウウ」

ラウンド2ハチマンVSグルグリウス

『炎帝の装備』

グルグリウスの体を炎が纏い炎で手に手甲をつくり炎の拳が出来そしてさらに炎は、体を纏い鎧も出来た

そして先に先手を打つたのが
グルグリウスだつた

『炎帝の鉄拳』

炎を纏つた拳で殴つて来た
それをハチマンは、防いだ

『ドッペルマン』

ハチマンは、影を実体化させ腕をクロスさせ防いだが
しかしグルグリウスはそのまま次の技を出した

「からの爆炎」

するとドッペルマンの腕でについてる拳から爆発し煙が発生した
「どうだいきなりだから対処できまい防いでいたとしても爆風のダメージあるからなそ

うそうちの間の白夢の森での秘密の件間だ続いてるからなそこんところよろしく

煙が晴れるとそこには、ドッペルマンしかいなかつた

「いない」

さすがにグルグリウスでも巻き込まれたと思つていたためにいないのに驚いた

「あの爆風にいち早く気付きかわしたのかだが一瞬でいなくなることは難しいはずだ

か」

グルグリウスが腕を組考え込んでいると

ドッペルマンが動きだしグルグリウスの顔面を殴つた

「いきなり殴り掛けるなよー声位かけろよな」

顔を擦りながら言うが相手は、影が実体化しているから喋ることは出来ない

そしてドッペルマンは、グルグリウスの手を掴み手四つ状態に成った

「俺と力比べでもやろうつてか」

ドッペルマンとグルグリウスは、手四つの勝負をしていると

グルグリウスの後ろから攻撃が来た

『シャドークロー』

グルグリウスは、後ろをふり向くとそこには

グルグリウスの影からハチマンが出てきている

「俺の影の中にいたのかよ」

『シャドーダイブ』だと後ろ気に入れた方が良いぜ』

するとドッペルマンは、グルグリウスに頭突きをかました

そしてそのあとグルグリウスの脇に腕をいれ身動きを取りなくした

「これで終わりだなグルグリウス『シャドーパンチ』」

ハチマンは、至近距離で攻撃をしようとしたが

「甘い喰らえ『炎帝の火柱』』

するとグルグリウスの下から火柱が立ちハチマンの左腕を巻き込んだ
「どうだ火傷位のダメージは、あるだろ」

ハチマンは、モロに喰らつたわけではないが左腕にダメージを喰らつた
「クソ（俺としたことがちよつとカツコつけたらこの様かよ）」

その間にグルグリウスは、ハチマンから離れ次への攻撃をする

『炎帝の晩餐』

するとグルグリウスの左右の手からサメのような鋭い歯が炎となり出てきたそして

そのままハチマンに攻撃を仕掛けたが

次の瞬間グルグリウスの目の前から消えていた

さつきも同じようなことがあつた

「また俺の影に入り込んだのか」

グルグリウスは、自分の影に目を向けていると

『シャドーボール』

ハチマンはドッペルマンの上にのりグルグリウスの上空にいた
「下じゃなく上かよ」

そしてそのままシャドーボールは、グルグリウスへ直撃した
と思いきや

『炎帝の炎球』

炎を纏いまるで太陽のように成つて身を守つた

「まだまだこれからだぞハチm

二人はいきなり強い魔力を感じた方へと目線を向けた

「何だよあのドス黒い魔力は」

ハチマンが驚いている、するといきなりグルグリウスが真剣な顔をして

「勝手で悪いがこの戦いは、次に持ち越しに貰うからな」

『炎帝の先導』

体に炎を纏いグルグリウスは、その魔力がする方向に向かつていた
（勝手に戦いを始めたヤツが勝手に終わらせて行きやがったまあ、戦いをしないですん

だし良いかな)』

そしてハチマンは、どうするか悩んでいると
後ろから近づいてくる人影がいる

「決定、復活」

それは、グルグリウスに投げ飛ばされた決定おじさんことツイーゴだつた
「うるさいヤツが戻ってきた」

「決定、s

『シャドーパンチ』

ツイーゴが攻撃をする前にハチマンは、攻撃をした

その攻撃は、ツイーゴにど真ん中で当たり

リング場にあつた岩山えと吹つ飛んだ

今度こそツイーゴが戦闘不能に成つた

「一様メリオダス達心配だし行くか」

メリオダス達を見つけようしてドッペルマンの背中にのり空から探索をしていると
ホークとエリザベスを見つけ側に行つた

「おい、お前ら大丈夫か」

「丸焦げだけどなお前も焦げてる」

ホークも体全体が焦げている

ハチマンは左腕が焦げている

「まあ、ちょっと聖騎士とやりあつてな」

「大丈夫ですかハチマン様は」

「ああ俺は、何とかな大丈夫だつた。メリオダスはどうした」

それを聞いたエリザベスは、目を開けて声を荒げた

「聞いてくださいメリオダス

途中でバンがエリザベスの口を手で止めた

「静かにしろとつとどこからずらかるぞ♪」

「バン、キング」

バンは、キングを抱えている

「メリオダス様を置いていくきですか」

「エリザベス今一刻も早く逃げるぞメリオダスのことは、心配ない」

「ですが」

「大丈夫だ」

「は、はい」

ハチマンは、エリザベスを説得した

「いつも静かなハチマンがここまで強く言うなんてそんなにヤバイのかよ」

「お前ら俺のドッペルマンに乗つて逃げるぞ」

そして皆がドッペルマンの上に乗り終わつた途端にドッペルマンが走り出した
そして走り出してまもなくすると

地面に異変が起きた

「最もスピード上げろハチマン」

「振り落とされるなよ」

それは、地面が空に吸い寄せられるように岩盤ごと空へ押し上げられた

「何だよこれ！」

「あのが神器を持つたディアンヌの本来の力だ」

そしてその岩盤は大きな塊となりそのまま下へと落下した

また一人増える仲間

「ほら、キング包帯巻き終わったぞ」

八つの大罪は、敵の攻撃とディアンヌの攻撃から逃げ切り今は、豚の帽子亭にいる
「ありがとう。ハチマン自分も怪我してるのでに」

「まあ、左腕だから少しは大丈夫だ薬も塗つたしな」

「少し体を動かすけどハチマンは、どうする」

「いや、俺は少し休むからな」

休もうとしたら後ろからメリオダスが歩いてきた

「悪いが次の町でハチマン少し買い出しに行つてくれ」

「話が違うぞメリオダス確かにお前は、一週間休みを出すと言つたはずだが」

メリオダスは、申し訳なさそうに頭を搔きながら

「今日だけ買い出しに行つてくれ一週間十一日だと思えば良いからさ」

「わかつた行つてくるよそれまで寝てるから着いたら起こしてくれよ」

そしてハチマンは、自分のベッドに着きそのまま眠つてしまつた

そして少し時間が立ち

「Z z z z z」

ハチマンがベッドで寝ているといきなり蹴り飛ばされた

「起きろ、ハチマン」

「痛いだろが」

ハチマンを蹴り飛ばした犯人は、バンだつた

「買い出しに行けつて団ちよが言つてるぞ」

「分かつた下に降りるから」

ハチマンが下に降りるとメリオダスから一つの注文か増えた

「悪いがエリザベスと豚野郎も一緒に連れてつてくれ」

「よろしくお願ひします」

「よろしくな」

「マジかよ」

そして二人と一匹は、買い出しへと出た

買い物にへと出たがハチマンは、自分から話しかけることをまずしない為に沈黙が続

いているとエリザベスが話しかけてきた

「その、ハチマン様腕の怪我は大丈夫何ですか」

グルグリウスとの戦いで腕を負傷した事についての話を持ちかけてきた

「大丈夫」

一言で帰された

がしかしハチマンは、心のなかでは
「（何で一緒に行かなきや行けないの俺人と一緒に買い物とかなれてないんだけどそもそも）」

こんな感じで頭がいっぱいだつた

そして買い物を全て買つた時だつた

「よし、全部買つたな早く野郎共の所へと帰るか」

「早く行きましょホークちゃん」

「早く行くぞつてあれ」

ハチマンの前方に見覚えがあると言うより少し前に戦つたはずのグルグリウスが此方歩いてきた

「あと時の白夢の森で来た聖騎士」

「ハイハイそうです私が皆のアイドルのグルグリウスです！」

此方にウインクをして手を振る

「戦いに来たのかが残念だがなこのホーク様もいるんだぞ」

「安心して良いよ俺があるのは、ハチマンにだ」

「俺にか」

「そうだ悪いがハチマンを借りて良いかつて言うか借りるからな」

「おい、ちょっと待つて」

半場強引にハチマンを連れつて行つた

そして二人は

「悪いな付き合つて貰つて」

「何だよ」

「実は、お前達に話をしておこうと思つてなヘンドリクセン達が何やら良からぬ事をしようとしているそれで何でかは、知らんが王女様とお前の所の店長の剣を狙つているから気よつけて置けよ」

敵であるはずのグルグリウスは、ハチマンに忠告してきた

「何で俺なんかに話すんだよ」

「一つ言えるとしたらお前の事何故かは分からんが信用できそうだからな」

グルグリウスが帰ろうとした時

山の方から強い魔力を二人は、感じ取つた

「また変な魔力かよ」

「ち、早すぎるだろアイツら」

「じゃあハチマン炎帝の先導」

グルグリウスは、体に炎を惑い山の方へと行つた

「エリザベス達が心配だし急ぐか」

ハチマンは、豚の帽子亭へと急いだ

そして豚の帽子亭へと着き

「ディアンヌとホーク、エリザベスは何処に行つたんだ」

「団長の所に」

「マジかよ」

どうするか悩んでいるとメリオダス達が帰つて來た

そしてその中に見たこともない男が人

「誰だ」

「ゴウセルだ」

また一人〈八つの大罪〉の仲間が増えた

行くぞ王都へ

「八つの大罪」の仲間が一人ゴウセルが増えた事で宴会が始まつたている
ハチマンは、離れた所で一人で飲んでいる

「ハア——」

ハチマンが長いため息をしているとホークが横に来た
「どうしたんだよ長いため息なんかついてよ。まさか仲間に入りづらいって言うじやないよな」

「いやそうじやなくて。俺ゴウセルの事嫌いなんだよ」

「何で嫌ってるんだよ」

「それはだなアイツの能力の一つで人の昔の記憶を見る事が出来る。その力で俺が言いたく無い事を喋つたりするから俺は、アイツの事を嫌いなんだよ」

ハチマンは、そう言うと立ち上がり

「何処に行くんだよ」

「俺は、一足先に寝るメリオダスに先に寝るつて伝えてくれ」

「(昔の事かアイツらの元気だつたな)」

ハチマンは、自分の部屋に行きそのままベットに横になつて朝まで眠つた。

～～～～～～～～～

そして

その頃リオネス王国では

グルグリウスが自分の部屋で横になりながら

「新世代か、嫌だ嫌だ（だつてアイツらの目と魔力と来たら

考え事をしていると扉が開きそこには、二大聖騎士長ドレフアスがいる

「何のようだ聖騎士長様」

「その言い方は、やめてほしいのですが」

「悪い悪いでどうしたんだよドレフアス」

「すいませんまだヘンドリクセン派の事について何一つ分からいのです」

「気にするなそう簡単に分かつたら苦労しないし俺も俺なりに動いても分かつてない事があるからな」

グルグリウスは、ドレフアスの肩に手を置いた

「すいません。では、失礼します」

そしてドレフアスが部屋から出つていて少し経つてからグルグリウスは

「だつてアイツらの魔力赤い魔神に似て過ぎてる」

「しかだがないな少し本気で探すか」

~~~~~

そして場所が変わり日も変わり豚の帽子亭では  
「なんだ下がうるさな。仕方ない起きるか」

下が騒がしくハチマンは、目が覚め下に降りると

「ついて来てくれるな」

「面倒臭えから俺バス♪」

「取られたのは団長の落ち度だもんねー」

「自己責任」

メリオダスは、三人に何かお願いしたが三人共に断られた

「慰めて」

「よしよし」

「団長♪」

断られエリザベスに助けを求めたそれを見たデイアンヌは、怒った

「何がどうなつてゐんだよ」

「それがですね」

エリザベスが何があつたのかをハチマンに説明してくれた

「成る程、剣を取られたか取り返したいと」

「そうなんだ。もう一度聞くぞお前らついて来てくれるか」

「「嫌だ」」

三人共断つたが

「行つても俺は、良いぞ」

ハチマンは、ついて行くと言つた

それを聞くと

「ありがとうハチマンお前は、良い団員だ」

「にしても意外だなハチマンは、断ると思つたけどよ」

メリオダスは、感謝したがホークは、意外だと言う

「失礼だなホークメリオダスには、返せない程の貸しがあるからな」

「そうかよ。でもよ何で剣とエリザベスちゃんを狙つてるんだろうな」

ホークとハチマンが喋つていると

いきなり

「宇宙人封印を解く最後の鍵だからよ」

「エリザベスそいつから離れろ」

エリザベスの近くに敵がいきなり現れた



していた

「気が変わったから俺も行くぞ♪」

「俺も行くぞ」

「どう言う風の吹き回しだよ♪」

「行くよ」

全員デイアンヌに握られ

「少しの誤差は、我慢してね♪」

「方向さえ合つてれば問題ねーよ♪」

「何でお前がついてくるんだよ♪」

「よく喧嘩する団長とバンを見てぜひ俺も学んでみたい♪」

「絶対エリザベスを助け出してね♪」

そう言つて投げ飛ばされた

「死ぬハチマンどうにかしろ♪」

「わかってる」

ハチマンは、魔力を使い

『影の盾』

影を二等辺三角形のようにして風からの抵抗を減らし王都へと向かつた

# 目指すは城？

ディアンヌに投げ飛ばされた四人は、無事に王都へとたどり着いた  
そしてたどり着いた瞬間敵陣に突つ込んで行つた  
「あくまで目的はエリザベスの奪還」

「了解」

「戦闘は最小限にとどめておけ!!」

「その最小限は、もつちろん本氣でいくよな団ちよ♪」

「殺す気でいく」

「いや、殺氣出し過ぎだらこつちまで怖くなるだろ」

「何だハチマン団ちよにびびつてるのかよ♪」

バンがハチマンを小馬鹿にしてる時に敵が攻撃を仕掛けて來た

「オーラ・バースト!!

「暗緑鞭!!

「豪炎の呪陣!!

「プラントウイップ!!

「パレットスコール!!

「雨!!」

「ウインドシユーター!!  
〔デスブレス〕  
死神の息吹!!」

「フリツクストーン!!  
〔フルカウンターブルース〕  
全反撃!!!」

メリオダスは敵の攻撃を跳ね返し止まらずにそのまま敵に入り込み殴り飛ばして行く

「いや、メリオダス怖。殴られた相手空中で何回転してるんだよしかもバンは、バンで聖騎士を魔力無しで殴つて行くしつてかほとんどメリオダスが倒してるな、何もしてないのって俺とゴウセルだけだな。でも俺武力の方は、キングと同じで弱いからなしかな  
いか」

「声が漏れているぞハチマン」

マジか、声が出てたかでも俺の声聞いてるつてる事は、戦いに集中してない証拠だなゴウセル。つてハチマンもじやないか人の事言えないじやんイケナイ、イケナイつてなんだ

その時

「なんだ・・・城から感じるこの異様な魔力は?」

「いやメリオダス正確には、城からでは、なく城の向こう側からだなしかも強い魔力が二

人しかもその内の一人の魔力なんかどつかで感じたことある魔力だつて言つてる場合  
じゃないよな相手ドンドン来るぞ」

「八つの大罪」同士で喋つている中で聖騎士達は、休ませる暇なく攻撃をドンドン仕掛け  
てくる

「倒しても倒してもキリが無いなまるで真夏の虫みたいに」

「つてかハチマンお前一人でも倒したか♪」

「仕方ない此処は、魔力を使つて一気にかたをつけるか」

ハチマンが一気に終わらせようと皆んなより前に出ると

「俺もやる」

ゴウセルもハチマンと同じように前に出で來た

「いくぞゴウセル」

「任せろ」

ハチマンとゴウセルは、魔力を高め一気に

「ドッペルマン」

「神器双弓ハーリット」

「神器お前何処に持つてるだよ」

「行くぞ」

「任せろ」

「”合技”過去話からの贈り物」  
ト ラウマ の もの がたり

ハチマンが出したドッペルマンに目掛けてゴウセルが弓矢を放ちドッペルマンを突き抜け放たれた元々弓矢の色が薄い紫色だつたのが黒く変わりその矢に聖騎士達を貫いた瞬間から聖騎士達は、その場に膝を突き倒れ込んで行つた

「何をしたんだお前ら」

「それは、俺が昔に経験したトラウマを聖騎士達が体験する」

メリオダス、バンは、聖騎士の方を見ると泣いている者やその場から逃げ出して行く者や自害を仕様とする者まで者がいる

「何で俺ばかり？」

「何でバラなんだよ？」

「違うんだ違うんだ違うんだ」

「俺じや無い俺じや無い」

「どうしてこうなるんだよ」

「一体どんな経験をしてきてるんだよお前仲間だけど逆に怖いわ♪」

「バンお前も経験してみるか？」

「だけど今がチャンスだ行くぞお前ら」

「おう」

「八つの大罪」は、王都の中に潜り込む事に成功したが  
「さてさてさーて王都に入り込めたのはいいけどこつからどうするか」

「街中では無闇に戦闘できないな」

「めんどくせえ～♪それはそれで」

「こうも街中を聖騎士がウロウロしてるとエリザベスの気配を探るのも容易じやねえ」  
「一か八か城に行つてみるかメリオダス城になら地下室か頂上にいる可能性が高い行つ  
てみる価値はあると思うぞ」

「よし、ハチマンの意見に乗るか」

城に向かおうとした時に遠くで大きな音が聞こえた

それを聞いたメリオダスは、音が聞こえた方へと向かう

「おい、メリオダス城そつちじや無いぞ！」

俺の意見を聞いて乗るつて言つたのによしか無いかついて行くしか無いか

## 聖騎士長との戦い

メリオダスが城の違う方向に向かつて走り出したメリオダスをハチマンは、追いかけつている最中でヘンドリクセンとギルサンダー出会い戦闘中である

「どうなつてるんだよヘンドリクセン。今リオネスは、何で異変ばかり起こつてるだよそれにバンは、何処に行つたんだよ」

何故ハチマンがこんな質問してるかと言うと

リオネスにいるはずのないディアンヌの魔力を感じるしキングの魔力も

「そんなもんは、知らんぞ」

「やれやれだな。ヘンドリクセンお前隠し事をしていると瞬きを二回ほどする癖があるぞ何を隠してるだこつちは、二対一だぞ」

今ハチマンのとなりにいるのは、ハチマン達が来る前にヘンドリクセンと戦つていたキヤメロット王国の王アーサー・ペンドラゴン

メリオダスは、ギルサンダーと戦つている

「と言うわけだお前もたのむぞ。名前は：」

「アーサーです。よろしくお願ひしますハチマンさん」

「アーサー気をつけろよアイツの『魔力・腐蝕』に足して更に黒い炎まで出しやがるからな」

「ご忠告ありがとうございます！」

「話をしている時間があるのか『波状の獄炎』」

ヘンドリクセンの剣の先から黒い炎が現れその炎は、二人に目掛けて襲つて来た  
ハチマンは、炎の前に立ち

「まずは、影で剣を作り『影切り』」

ハチマンの腕に影が纏まり剣となり飛んできた炎の影を切つた  
それにより飛んできた炎も影と同じように切れた

「やはりお前とは、相性が悪いな。やはり一番、楽そうなアーサーお前からだなそしてお前には、他の聖騎士達が相手をしてやるとするか頼むぞお前ら」

しかしヘンドリクセンの言つていた聖騎士達は、既にアーサーと一緒にいた者に倒されていた

「何…だと…」

驚いているとアーサーが剣を抜き動いた

「よそ見していていいんですか？」

そして剣と剣は、鎧迫り合いになり二人は、睨み合っている

「お前ごときが私に勝てるとは思つてゐるのか」

「やつてみないとわからないだろう」

「何処行つた!？」

ヘンドリクセンは、ハチマンいないことに気づいたが既に遅かつた

「後ろだよ!『影の一撃』」

剣だつた腕が拳に変わりヘンドリクセンを殴り飛ばし数メートル飛ばされたが直ぐに立て直した

そして殴迫り合いしていたアーサーは、巻き込まれないようにハチマンが影を使ひ助けていた

「やはり貴様は、苦手だ」

ハチマンの方を見るが

「消えただと!」

ヘンドリクセンは、またハチマンを見失つてしまつた

「後ろだよ!『影の一撃』」

また同じように殴られた

「クソ。おいお前も来い!」

そう言うといきなり魔術士が現れた

しかもその魔術士は、エリザベスを攫つた敵だつた

「あら、どうも」

『波状の獄炎』

「いくわよ！『巨大炎球』』

『『』合技』大波の獄炎球』』

「死ね！」

二人を飲み込む程巨大な炎が襲つて來た

# 登場、暴食の罪マーリン

「『合技』大波の獄炎』」

「二人を飲み込む程巨大な炎が波の形となりハチマンとアーサーに襲い掛かつて来た  
「どうするんですか！ハチマンさん！」

アーサーは、ハチマンの腕を掴み聞いてくる

中ハチマンは、テンパる事なく技を繰り出そうとし出した

「仕方ないな」

『シャドーボール』

シャドーボールは、敵の技とぶつかり相殺する事なく打ち破りヘンドリクセンに向

かって行き技が炸裂しヘンドリクセンは、倒れた

「やりましたね。敵の大将を倒しましたね！さすが『八つの大罪』の一人ですね」

「だろ俺って凄いだろ」

軽く言うとアーサーは

「ハイ、凄いです！」

「（軽く言つたのに本当に感激してしまったな！コイツ絡みづらいタイプだな）」

「後は、お前だけだな魔術士」

ハチマンは、残りの魔術士に魔力を使い威嚇をすると敵は、たじろいだ

「う…うう」

「それにしてもお前のツレの魔道士何してるんだよ何もしないでタダ突つ立てるだけで俺だつて少しぐらいは仕事してるのによどんなツラをしてるのか見てみたいものだな全く」

すると先ほど戦っていた筈の一人ギルサンダーとメリオダスと女の人が歩いて来た  
「メリオダスボロボロだな。ギルサンダーもボロボロだけどな。それに助け出せたみた  
いだな！メリオダス」

「おう！つて何でお前ギルサンダーが助けを求めているつて知ってるんだよ！お前に話  
してないだろ」

実はギルサンダーは、人質を取られヘンドリクセン に従つていたのであつた  
「それはな実は、エリザベスに聞いたんだよ！」

「エリザベスが？」

「そうだ。ギルサンダーが『八つの大罪』より強いとか言つてなかつたかつて聞いたか  
ら、エリザベスが喋つていたと言つてくれた。メリオダスが昔にギルサンダーにどうし  
ようもなくなつたら『僕は、『八つの大罪』の誰よりも強い』つて言えつて言つてたから

な

それは、昔メリオダスがギルサンダーの修行中に仕事で何日も仕事でいなくなる時に言つた言葉だつたのをハチマンは、覚えていたのであつた

「お久しぶりです。ハチマンさん白夢の森以来ですね」

「おう、そうだな。それでお前のとなりににいるのがマーガレットだな」

「ハイ」

「それと悪いなギルサンダー、ヘンドリクセンの事だが俺が倒してしまったんだよ、仇取りたかつただろうがな」

「仇を打ちたくないと言つたら嘘になりますが。構いません」

すると残つていた魔術士が動き出した

「ふ、ふざけるじや無いわよ！」

敵の事を無視をして話をしているとどうとう怒つてしまつた

そして敵の攻撃を受けてしまう

「何処だ此処は」

敵の攻撃は、瞬間移動でハチマン達を移動させてくる

「お、此処綺麗な場所だなハチマン」

「何をくつろいでいるのよ貴方達を此処に置いて行けば助ける事が出来ないだろ」!!

「確かにどうしましよう！メリオダス」

「終わりよ貴方達助け出す事が出来ないまま此処いるのよ」

瞬間移動で帰つたが

しかしハチマン達も王国に帰つていた

「何で此処にいるのよ」

「何で戻つて来てるのもう一度：消えろ

だかしかし瞬間移動移動したのは、ハチマン達ではなく敵の方だった

しかも何度も瞬間移動をして戻つて来て飛ばされての繰り返しをしている

「何やつてるだアイツ一人遊びか？ハチマンじやあるまいし」

「（おい、どう言う意味だメリオダス俺が一人遊びをしてるつて。まあ、確かによく一人遊びをしていたがな一人で野球、壁打ちテニス et cetera）」

敵は、何度もやられてる内に精神的にダメージを受けた

「お前か…お前か…よくもふざけた真似をこの私に屈辱を与えてくれたわね」

先ほどまだ何もしていなかつたアーサーの側近の魔道士しが敵の後ろにいる

「貧相な魔術士風情があああボロ雑巾にしてくれる」

すると敵は、アーサーの側近の魔術士に竜巻を発生させ攻撃をした

「あ」

メリオダスが何かを思い出したのか声を出した

「あいつの正体がわかつた!! まさかアーサーと一緒にだつたとはな」

「メリオダス誰なんだ?」

「分からぬのかハチマン相手が王国一だらうが敵う筈のない相手」

「おい、まさかそれって」

ハチマンの顔色が段々と悪くなってきた

「そうやつて怒りで我を忘れるクセあれほど（直せ）と言つたであろう？ 我が弟子ビビア  
ン

そして敵の魔道士は、首の紋章に目が行つた

「その首の文様は、紅蓮の豚!! あ…あ…あ…あ…あなたは、八つの大罪×暴食の罪<sup>ボアシン</sup>」

マーリン

「やつぱり、マーリンだと!!」

それを聞いたハチマンは、その場に倒れ込んだのであつた

# 国王陛下救出完了

「あれ、此処は何処だ」

ハチマンは、目が覚めたが体が動かなかつた  
何故ならば体を大の字で縛られているからである

「目が覚めたか。ハチマン殿」

そしてその場にいたのは、同じ〈八つの大罪〉の仲間〈暴食の罪〉マーリンだつた  
「おい、俺に何をする気だはなせ」

「安心しろ直ぐに済むからな」

そう言うとマーリンが襲つてきた

そして恐怖のあまりハチマンは、目をつぶつていると声が聞こえてきた

「ハチ…きろ」

「ハチマ…ろ」

「ハチマン起きろ」

ハチマンは、聞き覚えのある声を聞き目を開けた

~~~~~

そしてその目にいたのは、メリオダスだつた

「大丈夫か急に放心状態になつて」

「いや、もう大丈夫だ」

そう言いつつ八幡は、マーリンから距離を取ろうとしている

「何に、怖がつてゐるのかな。ハチマン」

「べ、別に怖がつてはねえよ、団長」

「昔のトラウマでも思い出したのか？マーリンにとつ捕まつた時のでも」

「知つてるなら聞くなよ」

ハチマンを弄つたあとメリオダスは、マーリンを見た

「マーリンお前には、聞きてえことが山ほどあるがいまは、」

「そうだな」

そう言ふとマーリンは、ハチマンとメリオダスとギルサンダーとマーガレットとアーサーを一瞬にして瞬間移動させたが

「ここは？ 何処だ？」

「王室の外のようだな。中に移動しようとしたが・・・はじめられた」

「失敗してじゃんダツサ」

ハチマンは、ボソッと喋つたがそれを聞き逃さなかつたマーリンは、ハチマンの方を

睨
んだ

「何か言つたが良く聞こえなかつたもう少し大きな声で言つてくれると助かるのだが」

『そう言いながらハチマンを脇に挟んだ

「離れてろお前ら」

「また団長殿お前の力でもこの扉は破れぬぞこの部屋ごと”完璧なる立方体”魔界に由來の術全ての力を跳ね返す力の大小に関係なくない」

マーリンは、ハチマンを脇に締めながら扉に近づき

扉を開いた

「どうやつて開けたんだ？」

『絶対強制解除』

扉を開きそこにいたのは、魔王のバルトラとエリザベスがいた

そしてエリザベスは、メリオダスを見た瞬間抱きついた。

メリオダスは、バルトラと話をしている最中ハチマンは、マーリンに

「すいません、そろそろ離してもらえませんかねえ？マーリンさん」

「おつとすまん。喋る事が出来たんだな、では、先程何つて言つたか教えてくれるか？」

「・・・・・」

ハチマンは、何か言うと不味いと思つた口を閉ざした

そしてその中もう一人国王が幽閉されていた部屋の前に一人の男が現れた
それに気づいたギルサンダーは、その男を睨んだ

「ドレファス」

そしてメリオダスは、普段と変わらない様子で

「お前と会うのも久しぶりだな」

「これは、どういうことだ」

ドレファスは、この状況に動転していた

そしてギルサンダーは

「ヘンドリクセンは、死んだ。一生逃れない罪で懺悔することもなく」

そして開かせれる十年前八つの大罪が王国転覆をした。

真相とは、ヘンドリクセンとドレファスが実は、二人で聖騎士長ザラトラスを殺した。

そしてその罪を全て八つの大罪へと擦りつけそして八つの大罪が聖騎士長を殺した。
となつていてたのだ

「（うんうん。これで全て終わつたな王国転覆をした。と言う濡れ衣も終わりようやく

人からの視線を気にせずに生きれるようになる）

王国転覆の容疑が無罪と証明され人に気にされずに生きていく

おいそこボッチで人からも気にされないし気配を消せるからいいだろうと思つてる

だろ

とハチマンが思い込んでいると国王が咳き込み膝をつくとマーリンが駆け寄り国王が危ないと告げる

「衰弱している急いで医療が必要だ。キヤメロットへ行き治療してることにするがもんだけは、無いか？」

それを聞いたエリザベス、マーガレットは

「問題ありません」「

と答えた

「では、早速キヤメロットへ行つてくる」

「では、皆さん。国王の治療が終わりました。またお会いしましよう」

マーリンとアーサーは、挨拶をしてキヤメロットへと瞬間移動した。

が、しかし皆んな気づいては、いなかつた一緒にハチマンを連れつて行つてることに。

「え！俺もキヤメロットに！」

番外編

デイアンヌと小町の異世界旅行

「ん~」

デイアンヌが目を覚めると

「あれ、此処どこ？」

目を覚ますと見たことのない場所で寝ていた

「ん?」

体を触り

「胸がない」

窓に自分の顔が写り

「誰~」

デイアンヌは、叫んだ

～～～～～～～～～～～～

「早く起きろ、デイアンヌ~

「うるさいななによ~」

目を擦りながら目が覚めた

「ん（え此処どこ）」

小町が目が覚めたら、見たことのない景色が広がっていた
「（体が大きくなつてゐる）」

しばらく沈黙していると

「ディアンヌどうしたんですか？」

そこにエリザベスが現れた

「（凄く綺麗な人がいる）」

「大丈夫ぶディアンヌ」

しばらく考え

「（これ、夢か）」

～～～～～～～～～～～～～～

「（此処どこなんだろ）」

ディアンヌは、夢だと思い探索していった

そして、あるものを見つけた

「あれ？これハチマンが描かれてる」

そこには、ハチマンの写真があり花が飾られていた

「（まるで死んだ見たい）」

そして、家を出て

「探索開始」

「おいしい」

「団長の作る料理とは、違うからな」

小町は、バンの作ったご飯を食べていた

「そう言えばバン様二人は、何処に行つたのですか」

バンは、料理をしながらエリザベスの問いかけに答えた

「アホ毛二人が山に狩りしに行つたぞ夕方まで戻らないとさ」

「そうなんですかその間一緒に遊ばびませんかディアンヌ」

「そうだね」

その頃のアホ毛二人は

「おい、ハチマンそつちは、どうだ」

「大量だ」

カゴ一杯のフルーツを見せた

「よし、その調子でどんどん行くぞ！」

「おう」

~~~~~

ディアンヌは、小町がご飯を食べてる時には外に出て探索していた

「小さいと普通に歩ける」

「こ、小町ちゃん」

そこに現れたのは、由比ヶ浜だつた

「えつ」

その場にディアンヌしかいなく自分が呼ばれたのかと思い振り向いた

「その、今から家に行つてヒツキーに線香をあげに行つて良い?」

「えつ（線香つて何）」

「駄目かな」

断られたと思い元気を無くし下を向いた

「（家に帰り道もわからんしこの人に案内してもらおうかな）大丈夫」

「本當」

さつきまで下を向いていたが元気が戻った

そして、家に着き

由比ヶ浜は、ハチマンの仏壇の前で手を合わせた

それを見ていたディアンヌは、あることを思い出していた

「（確かにハチマンって異世界から来たとか言つてたような気がするな）」

そんなことを考えながらディアンヌは、寝てしまった

～～～～～～～～～～～～～～

小町とエリザベスは、二人で話をしていた

「つて夢を見たの」

「そなんですか面白いですね」

小町は、自分がいた世界のことを夢として話していた

そして小町は、ハチマンのことを思い出した

「（お兄ちゃん元気にしているのかな）」

少し気持ちが落ち込んだ

それを見たエリザベスは

「早く戻つて来ると良いですねメリオダス様達」

「そ、そうだね（メリオダスって誰なんだろ）」

「ん、とても良い天氣で眠くなつてきました」

「本当眠くなつて來た」

横になろうとした時に

ハチマンに似た絵が書かれていた

「（お兄ちゃん）」

そして、小町も眠りに着いた

そして

「小町ちゃん、小町ちゃん起きて」

呼ばれる声をして目を覚めた

「どうして、家の中にいるんですか」

「小町ちゃんが線香あげても大丈夫って言つたから」

「そうでしたつけ（何か変な夢を見た）」

~~~~~

「おい／＼お前ら」

メリオダスとハチマンが戻つてきた

その声にディアンヌは、目を覚ました

「あれ、団長」

「おう、ディアンヌ寝てたのか」

メリオダスは、笑つて喋つた

「一様人何だから寝るのは、当たり前だろ」

「いやいや、別にそう言うつもりで言つたじゃないですよハチマンさん」

「そうかよ」

「おう収穫は、どうだつた」

「大量だ」

カゴを見せ

「飯作りするかハチマン」

「そうだな」

「二人が〈豚の帽子亭〉に行こうとした時に

「ハチマンちよつと良い」

ディアンヌが止めた

「なんだ」

ディアンヌは、夢の事をハチマンに喋ろうとしたが

「ごめんやつぱり何でもない」

「そうかよ」

ハチマンは、〈豚の帽子亭〉に入つて行つた

八つの大罪高校

此処は、リオネス総武高校この高校には、校則を守らない問題児ものがいる
そいつらの事を皆口を揃えて言う

〈八つの校則違反〉と

ハチマンが奉仕部の部活中で依頼人が来ないと本を読んでいる
そして雪ノ下と由比ヶ浜は、二人で話をしている
と部室の扉が開いた

扉を開けたのは、〈八つの校則違反〉のメリオダスだった
「オス、ハチマンちよつと付き合つてくれ」

「いや、今部活中何だが」

「別にいつも本読んでるだけだろ」

「依頼人が来なければな」

「良いじやねかちよつとだけで良いから付き合つてくれよ」

メリオダスは、ハチマンの腕を引っ張りながら喋つていると

「貴方がこの学校で有名な不良生徒の〈八つの校則違反〉と言われてるメリオダスくん

ね

「そうです俺が有名な不良生徒の〈八つの校則違反〉のメリオダスです」

「ゆきのん〈八つの校則〉って何?」

由比ヶ浜は、この高校の不良生徒の噂の事を知らなく雪ノ下に質問すると質問を返してあげた

「八つの校則違反」って言うのは、この学校で有名な不良生徒一人目は、メリオダス彼処にいる子ね、二人目は、ディアンヌ。三人目は、バン四人目は、キング。五人目は、ゴウセル。六人目は、マーリンそして最後七人目は、エスカノール。七人いるわでも噂では、八人いると言われてるわ」

「八人目って誰なのか知っているのゆきのんは?」

「知らないわでも一つ言えるとしたら比企谷くん見たいにどうしようもない不良生徒だろうけどね」

それを聞いたメリオダスは

「良く分かつたなそうですハチマンが〈八つの校則違反〉の八人目だ」

それを聞いた由比ヶ浜は、驚いた

「え、ヒツキーってその八つのたい何とかつてヤツなの」

「八つの大罪な由比ヶ浜」

そして冗談で言つたつもりだつた雪ノ下は、それを聞いて驚きを隠せないでいた
「えつと比企谷くんこれは、どう言うことなの」

雪ノ下は、目が虚ろになつていた

そして更に部室にバンも入つてきた

「一体いつまでかつかるだよ早くハチマンを連れてこいよ♪」

するとバンは、ハチマンの近くによりハチマンを肩に担いだ

「おい、待つてバン俺を担ぐな」

「団長早く行こうぜ～早くハチマンにも見せてやりたいしよ」

バンは、ハチマンの事を無視してそのまま部室を出でいつた

「俺を置いていくなよ」

メリオダスも一緒に出つて行つた

「ちょっと待ちなさい比企谷くん」

雪ノ下は、部室から出るがそこにはもうバンに担がれてるハチマンの姿無かつた
そしてハチマンは、バンに担がれて來た場所は、屋上だつた
そして屋上に広がつてた景色は

「どうだ屋上にピアガーデンブタの帽子亭を作成した」

「何だよこれ」

つ
づ
く
?

雪ノ下&由比ヶ浜VSメリオダス&バン

「（不味い今とてもまずい状態だ）」

今ハチマンは、ビアガーデンブタの帽子亭にいる
いるだけなら良かつたがブタの帽子亭には、雪ノ下、由比ヶ浜と八つの大罪のメリオ
ダスとバンが睨み合つて

何故睨み合つているかそれは、数日前まで遡る

数日前

それは、ハチマンが普通に授業が終わり奉仕部に向かおうとし席を立つたら
後ろから手が伸びることに気づかずハチマンは、担がれてしまつた
「バン！」

「ほら、屋上に行くぞハチマン♪」

そしてそのままハチマンは、屋上に連れていかれつてしまつた
そして下校時間までブタの帽子亭に捕まつてしまつた
そして次の日

ハチマンは、パンを警戒しつつ教室を出ようとしたが今度は、メリオダスに捕まり昨日と同様に下校時間までブタの帽子亭に捕まつてしまつた
そしてさらに翌日

ハチマンは、すぐさま捕まるまいと教室を出ようとしたが今度は、メリオダスとパンが二人掛かりでハチマンの行く手を阻んだ

そして翌日

さらに翌日

・

そして奉仕部にて

雪ノ下と由比ヶ浜は、我慢の限界だつた

「今日もヒツキー来ないねえ、ゆきのん」

「そうね」

・

そして痺れを切らした二人は、ブタの帽子亭に乗り込んだのである

由比ヶ浜とバン二人のバトルが始まつた

「ヒツキーを返して」

「嫌だハチマンは、俺たちの物だ♪」

「私たちの物だよ!」

「(そもそもバンの物でもないしお前らの物でもないってか俺、物扱いかよ)」

「比企谷くん何故? 奥にいるのかしら? 早く此方に来なさい」

八幡は、店の奥に隠れていたが雪ノ下に見つかってしまった
そして八幡も席に着いた

「さてさてさーて。役者も揃つたしこれよりハチマン争奪戦の返しだな」

「争奪戦も何も比企谷くんは、私たちの部活の仲間なのよ」

「(雪)ノ下俺のことを仲間だと思つてくれていたのか! いつもいつも雑用を押し付けて
くるのに(♪)」

「所詮は、部活の仲間程度だろう。俺たちは、お前らよりも前からの付き合いなんだよ

♪

「付き合いなら確かにお前らとは、長いけど腐れ縁みたいなもんだな)」
「そんな事良いからヒツキーを返してよお♪」

「嫌だ！ハチマンは、ウチのシェフとして働いてもらう！」

「（え！俺此処で働くの初めて聞いたんですけど！ダル）ハアー」

ため息を吐いたのを聞き逃さなかつた4人は

「「「何ため息（ついているのかしら）（ついてんだよ）（ついてるの）（ついてんだ）」」
「うつ（誰かこの状態から救つてくれ〜）」

その願いが叶つたのか救済者が現れた

「みんな中に閉じこもつて何してるの」

そこに現れたのは、ディアンヌだつた

「（助かつた！）」

「実は、だな…」

何故このような事になつたかを、ディアンヌ説明したら

「それだつたらさあ、此処で部活すれば良いんじやない？」

「「「「それだ！」」」

そして奉仕部は、ブタの帽子亭でやる事になつたのであつた
続く？